

平成23年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

—マイクロ・レベル FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。FD を三層に分けて考察することの意義とその具体的な内容については、これまでも FD 研修会等で折にふれてお伝えしてきましたが、2009 年に学士教育課程と大学院教育課程における FD が義務化され、今年で 4 年目を迎えることから、改めて FD 三層論について確認し、今後の FD 活動の発展につなげたいと思います。※

マイクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務委員等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のようにとらえられてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、2007 年以降、本学では、複数の学部で、また学士課程教育センターが中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、センター主催の年間 10 回以上にも及ぶ授業方法改善のためのワークショップの実施です。

今後は、マイクロ・レベルの FD を、教員のキャリアパスの問題と連動させ、助教、准教授、教授のそれぞれの職位に応じた FD のフェーズ（わかる→実践できる→開発できる→教えられる）を設定することで、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を用意していきたいと考えています。

※ 2007 年に大学院設置基準が見直され、また、2008 年に大学設置基準が見直されたことにより、2009 年度から学士教育課程と大学院教育課程において FD の実施が義務化されました。

大学 FD 委員会委員長

教学部長 菊池重雄

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	4
(6) 今後に向けて	5
2. 学部の活動.....	6

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	47
(2) 研修プログラム内容	47
(3) 実施の状況	48
(4) 実施後のアンケートから	48
(5) ディスカッションの実施	51
(6) 実施の成果	54
(7) 今後の課題.....	54
(8) 終わりに	55
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	56
(2) 配付資料・参考資料	57
(3) 実施の成果	59
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	61

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	63
2. 集計結果及び公表	63

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	83
2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	85
3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	86
4. 玉川大学 FD 委員会規程.....	88

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	菊池重雄
副委員長	学士課程教育センター長	大藤正
委員	文学部	奥山望
委員	農学部	富田信一
委員	工学部	小倉研治
委員	経営学部	伊藤良二
委員	教育学部	宮崎豊
委員	芸術学部	小倉康之
委員	リベラルアーツ学部	小山雄一郎
委員	通信教育部	守屋誠司
委員	学術研究所	切田節子
事務担当	学士課程教育センター	山崎千鶴
事務担当	教職センター	平山守
事務担当	教学部教務課	高橋正彦
事務担当	教育企画部教育企画課	大野太郎
事務担当	人事部研修センター	柳原達宏

(3) 今年度の活動計画および課題

- ・大学 FD 委員会主催の多様な研修会を開催する。とくに、通常教育活動上のさまざまな問題を探し出し、それを解決するための研修会等を考えていく。
- ・大学院 FD 委員会との連携を図る。
- ・教員相互の授業参観を推進する。

- ・コア科目の「学生による授業評価アンケート」を改訂版にて実施する。

(4) 活動状況

今年度は、昨年度末の東日本大震災の影響から、前期の活動は大きく制限された。

大学 FD 委員会については、昨年度同様、隔月に開催し、さまざまな取組を検討、実施することができた。また、議論を通じ、大学 FD 委員同士の共通認識を図ることができた。

研修会等については、春学期間は節電対策等により開催することができなかった。しかしながら、秋学期においては、学内外から講師を向かえ、多様な研修会等を開催することができた。一つには、平成 25 年度より履修単位上限 16 単位になることを踏まえ、関連する事項についての研修会を 2 件開催した。10 月には金沢工業大学 藤本元啓先生（元学生部長・教授）から「シラバス（学習支援計画書）について－金沢工業大学の取組」と題した講演をお願いした。また、11 月には、愛媛大学の佐藤浩章先生（教育・学生支援機構教育企画室准教授）をお招きし、「学生の学習を促すシラバスの書き方～グラフィック・シラバスでさらにグレードアップ～」をワークショップとして実施した。

さらに、授業方法についても一層の工夫が必要になるであろうということから、10 月に「アクティブ・ラーニングの指導法－Affinity Grouping」のワークショップを、昨年度に引き続き開催した。授業でアクティブ・ラーニングを活用することについてはいまや当然のこととされているが、逆に万能薬的な見方が危惧される。本来は、科目や授業内容によって活用される授業方法を選ぶことが必要である。そのことから、12 月には、本学教育学部 山口栄一先生に「学生の理解を重視する大学授業」という演題で講演会をお願いした。

また、昨今の大学における新たな問題として、発達障害のある学生への対応が挙げられることは多くの大学で耳にするところである。本学においてもそれは例外ではなく、複数の学部から相談を受けているという現状がある。そこで、信州大学の高橋知音先生（教育学部・教授）をお招きし、「発達障害をもった学生への対応」について講演をいただいた。

大学授業の授業参観についても昨年度に引き続き実施し、大学教員の他、広く学園の教職員が参加した。学部によっては広く公開する授業は実施しないところもあったが、積極的に公開してくれる学部もあり、多くの職員が授業を参観することができた。逆に、大学教員が参観することが難しい状況があることがわかった。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」は今年度から改訂版で実施することになっていたが、春学期は東日本大震災、節電計画などの影響により、変則的な学事日程で授業が行なわれたため、春学期のアンケートの実施は見送った。一方、秋学期については、科目群を限定することなく、全開講科目（実験実習実技科目は除く）で実施した。

また、国内外の FD 活動に関わる情報収集も継続して実施し、複数の教職員をフォーラムやシンポジウムに派遣することができた。

<平成 23 年度>

4 月 25 日	第 1 回大学 FD 委員会 開催
5 月 23 日	第 2 回大学 FD 委員会 開催
6 月 4 日・5 日	大学教育学会年次大会（東京 桜美林大学） 職員派遣
6 月 10 日	千葉大学 アカデミック・リンク・セミナー 職員派遣
6 月 19 日・20 日	European First Year Experience 6th Annual Conference 教員派遣
6 月 21 日～24 日	24th International Conference on The First-Year Experience 教員派遣
7 月 7 日	私学高等教育研究所「第 48 回公開研究会 IR の基本原理と活用—国際比較と日本型 IR」 職員派遣
7 月 9 日	立命館大学主催「全国私立大学 FD 連携フォーラム」 職員派遣
7 月 18 日	第 3 回大学 FD 委員会 開催
7 月 20 日	国立教育政策研究所「公開研究会 グローバル化の進展と教育のあり方」 職員派遣
8 月 5 日	神奈川大学「高大連携協議会フォーラム」 職員派遣
8 月 31 日 ～9 月 1 日	初年次教育学会年次大会（福岡 久留米大学） 教職員派遣
9 月 2 日	東北大学・国立大学協会「第 14 回 東北大学高等教育フォーラム」 職員派遣
9 月 16 日	「一年次セミナー」担当者研修会 開催
9 月 26 日	第 4 回大学 FD 委員会 開催
9 月 30 日	「一年次セミナー」担当者研修会 開催
10 月 8 日	法政大学教育開発支援機構 F D 推進センター「第 9 回 FD シンポジウム」 職員派遣
10 月 19 日	科目担当者研修会 ワークショップ「アクティブ・ラーニングの指導法—Afinity Grouping」開催
10 月 28 日	科目担当者研修会「シラバス（学習支援計画書）について—金沢工業大学の取組」 開催
11 月 1 日	Society for College and University Planning “Campus Heritage Symposium” 教員派遣
11 月 18 日	大学入試センター「国際シンポジウム 教育テストの可能性」 職員派遣
11 月 21 日	第 5 回大学 FD 委員会 開催
11 月 25 日	NPO 法人大学の明日を考える会「NPO 法人設立記念講演会」 職員派遣
11 月 26 日・27 日	大学教育学会課題研究集会（山形 山形大学） 職員派遣
11 月 28 日	科目担当者研修会「学生の学習を促すシラバスの書き方」 開催
12 月 1 日	京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会 職員派遣
12 月 2 日	大学コンソーシアム京都「高大連携教育フォーラム」 職員派遣

12月4日	同志社大学・北海道大学・大阪府立大学・甲南大学「第2回 IR シンポジウム」 職員派遣
12月11日	文部科学省平成 23 年度先導的大学改革推進委託事業シンポジウム「大学における教育活動の評価をどうとらえるか」 職員派遣
12月16日	科目担当者研修会「学生の理解を重視する大学授業」 開催
1月16日	第6回大学 FD 委員会 開催
1月17日～23日	コア科目の「学生による授業評価アンケート」実施
1月18日	科目担当者研修会「発達障害をもった学生への対応」 開催
1月27日	立命館大学「大学における根拠に基づく 教学改善と IR フォーラム」 職員派遣
2月28日・29日	科目担当者研修会 「プレゼンテーション研修会」開催
3月1日・2日	大学 FD 委員会主催 「平成 23 年度新任教員研修会」開催
3月3日・4日	大学コンソーシアム京都「第 17 回 FD フォーラム」 教職員派遣
3月5日	第7回大学 FD 委員会 開催
3月15日・16日	京都大学高等教育研究開発推進センター「第 18 回大学教育研究フォーラム」 教職員派遣
3月27日	「一年次セミナー」 新規担当者研修会 開催

(5) 活動の成果

科目担当者研修会では、内容によって形態を変えて実施した。例えば、新しい取組に向けた考え方や理解促進については、先進校の取組を聞くという講演会の形態で行なった。また、授業方法などの教員個々の取組については、ワークショップの形態で実施することで、能動的な取組を目指した。さらに、これまでとは違った視点からの取組については、講演とパネル・ディスカッションや事例報告など、複合的な形態で行なった。それにより、一層の理解と問題意識を教員に実感してもらえたと考えている。

また、内2件の研修会については、各学部から一定数の教員の参加を義務付けた。FD 活動の取組については、大学には実施する義務があるものの、各教員には義務付けを行なってこなかった。しかし、大学が負う「義務」には教員に受けさせることも含まれるという考えから、各学部で義務付けを行なった。それにより多くの教員が研修会に参加し、また、参加者が学部の会議等で講演会参加報告などを行なうことで、学部での情報共有を図った。

なお、科目担当者研修会においては、大学開講科目を担当している非常勤講師も全員を対象としている。他大学の事例を確認するところでも多く見られるが、本学ではこれまでのコア科目担当者研修会も同様、授業で学生と接するという点においては専任・非常勤の差はなく、学生にとっては等しく「担当の先生」であることから、本学の科目担当者研修会においては非常勤講師も受講対象としている。その結果、受講者の多様性が広がると同時に、非常勤講師の教育力向上にも貢献することができた。

プレゼンテーション研修会では、実施後のアンケートで多くの受講者がその有用性を高く評価していることが分かった。しかしながら、それはプレゼンテーション技術向上のために

有用だということではなく、受講したことによって「気付くことができた」という点での評価とみられる。こうした意識としての向上は技術面での向上よりも普遍性が高く、ただ受講した結果以上の成果があったと考えられる。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」では、学生の直接の声を確認することができた。結果は科目担当者本人にのみフィードバックされており、翌学期の授業改善に役立っている。

また、他大学等で開催されるセミナーや研修会に参加することで、他大学の取組についての情報収集を図り、その内容を学内で報告し、情報の共有につながった。

(6) 今後に向けて

本学では比較的早期から FD 活動に取り組んでおり、その多くがこれまでの実施から随時、改善を図るべきと考えている。科目担当者研修会については今年度の内容を引き続き実施すると同時に、複数の新しい研修会等を開催したい。また、通常の教育活動上のさまざまな問題を探し出し、それを解決するための研修会等も考えていくと同時に、今年度実施した新しい取組については、次のステップとして行なうべき内容を検討していきたい。例えば、発達障害のある学生の対応については、今年度の内容が本学にとって適したものであったのか、適したものであったならば次はどのような内容を実施するのか。また、適したものでなかったのであれば、どういう内容が適しているのか、検討していきたい。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」については、引き続き実施することとする。一方、来年度からは US（ユニバーシティ・スタンダード）科目が開設される。US 科目のアンケートについては、各学科の教育課程上の科目の扱いも含め、検討を要することとなる。

また、平成 25 年度より実施が予定されている大きな改革、つまり、履修上限 16 単位に向け、必要に応じて、多様な研修会等を開催するべく、検討していきたい。

2. 学部の活動

平成 23 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	秋セメ終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*3	学外実施
経営学部	7 名	5 回	秋セメ終了後*1	全員	—	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	13 名	4 回	秋セメ終了後*1	全員	—	学内実施
芸術学部	6 名	12 回	秋セメ終了後*1	全員	学内	学内実施
リハビリアーツ 学部	6 名	2 回	秋セメ終了後	全員	—	学外実施

*1: 春学期の学生による授業評価は震災の影響で見送り、秋学期のみ実施した。来年度以降は年 2 回実施の予定。

*2: 文学部における学生による授業評価結果公表は、比較文化学科のみ実施している。

*3: 学外には総括した内容、学内には全てを詳細に報告書冊子と Web で公表している。

※コア科目についての学生による授業評価は別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

現今、大学は大変厳しい状況に置かれている。社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実を受け、大学教育はそれに対応すべく、役割意識と方法論の変革を余儀なくされている。また不況下での就職難に対応するため、学生の意識付けと就職指導も、大学にとって重要性を増している。

かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長、教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科主任、および 2 名の FD 委員によって、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) 文学部 FD 研修会「科学研究費研究報告・談話会」

①概要

文学部教員の研究力向上のため、科研費申請に関する報告会を開催。

②到達目標

特に若手教員を中心とした教員の参加を促し、学部内に科研費申請に向けた積極的な機運を醸成するきっかけとする。

③活動内容

実施日 : 平成 23 年 9 月 8 日 (木)

場 所 : 大学 5 号館 115 会議室

内 容 : 現在、文学部で科研費を取っている 6 名のうちの 5 名の教員に、その研究報告とともに科研費申請について経験的に語ってもらい、科研費申請の意識付けとノウハウの情報共有をはかる。

予算措置 : なし(無料)

④評価

11 名が参加。科研費申請のコツについて意見交換を行った。また普段はなかなか触れることのない同僚の研究に触れる機会にもなり、参加者にとって良い刺激となった。

(2) 授業参観

①概要

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

②到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

③活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：人間学科のオムニバス授業 1 科目と比較文化学科の 3 名の教員の 4 科目で実施。

④評価

参観した教員、参観された教員は、ともに緊張感と刺激を受け、有用なフィードバックを得ることができた。また「人間学総合セミナー」では参加した教員が、単に参観にとどまらず、授業の討議に加わることで教育支援の役割をも果たした。

参観者の少なさは今後の課題である。同じ時間に授業を持っているなど、参観したくてもできないケースも多いが、広報の仕方にも検討の必要がある。また、参観後のフィードバックのやり方も、よりよい成果に結びつけるには検討の余地があると思われる。

(3) 学外セミナー等への教員派遣

①概要

他大学での FD 活動の取り組み方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

②到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③活動内容

(1)大学コンソーシアム京都 FD フォーラム（京都）

開催日：平成 24 年 3 月 3 日・4 日

派遣者：文学部教員 4 名を派遣

派遣後の報告：学科会での報告

予算措置：文学部共通 FD 予算

(2)大学教育研究フォーラム（京都大学）

開催日：平成 24 年 3 月 17 日・18 日

派遣者：文学部教員 3 名を派遣

派遣後の報告：学科会での報告

予算措置：文学部共通 FD 予算

(3) FD のための情報技術講習会（私立大学情報教育協会主催）

開催日：平成 24 年 3 月 1 日～3 日

派遣者： 文学部教員 1 名を派遣

派遣後の報告： 学科会での報告

予算措置： 文学部共通 FD 予算

④評価

派遣人数に関しては目標を達成。それぞれの参加者が成果を持ち帰っている。

(3)に関しては、講習会に参加した教員が、他の教員とノウハウを共有するため、学内で講習会を開く予定である。

(4) 授業改善のための公的試験活用 (人間学科)

①概要

「語彙・読解力検定試験」を用い、学生たちの、ある程度の長さの文章の内容を正確に読み取る力 (読解基礎力) を測定し、授業改善の指針とする。

②到達目標

読解基礎力の測定に必要なデータを収集・分析する。

③活動内容

実施日 : 平成 23 年 6 月 18 日

対象試験 : 語彙・読解力検定試験

対象学年 : 1 年生

参加人数 : 84 名

④評価

「語彙・読解力検定試験」の結果と、春セメの GPA、および入試形態との関係について分析を行った。今後も継続的に実施していく。

(5) 授業設計・成績評価ミーティング (人間学科)

①概要

複数担当者による授業を対象に、授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なった。

②到達目標

各科目の授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得ること。

③活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討 (特に「コピペ」提出物に関する評価問題)、他科目との連携の可能性、教員による授業評価。

それぞれ 5 名の担当で構成される「人間学基礎ゼミ」「基礎演習」は、授業の計画、評価について話し合いを持った。授業の終了後も評価を持ち寄り、教員による授業評価を行った。特に、「コピペ」に関しては、来年度、徹底的に「コピペ」と引用について教えることを申し合わせた。また、来年度は一年次セミナーとの連携も取っていく予定である。

5 名が担当する「名著講読」については、春学期の授業開始前に授業担当者が集まり、昨年度の授業経験について話しながら、授業についての改善点等を提案

し合うというミーティングを実施した。担当者間には授業方法において大きな違いがあったが、そのことがかえって、各自が自らの授業改善のためのヒントとして役立っている。

④評価

授業開始前授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成という目的が概ね達成されたことが、セメスター終了時のミーティングにおいて確認された。

(6) 学生による授業評価アンケート（比較文化学科）

①概要

比較文化学科専門科目群全科目について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

②到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③活動内容

実施時期：

秋学期末（春学期は、震災に伴うスケジュールの大幅変更で実施が困難になったため、秋学期のみの実施とした）

対象科目：

比較文化学科の全科目（秋学期開講分・ゼミと教職関連を除く）

集計：

対象となる全 77 科目中 74 科目を回収、延べ回答者数は 2,241 名であった。集計はクラス別、科目グループ別、科目群別、全体の 4 レベルで行った。

フィードバック：

結果は大学ホームページ上で公開すると共に、各教員には、授業改善に資するため、授業ごとの集計結果を返却する。

予算措置：

比較文化学科予算

④評価

学生の意見聴取には良い方法であるが、集計が次の学期になるため、授業担当者による具体的な改善の様子は、学生には見えない。結果を承けた具体的改善の様子ないし教員からのコメントなどを学生に見せ、アンケートの手応えを実感させる工夫なども、特に毎年続けていくのであれば、必要であろう。それをどういう形で実現するかが今後の課題である。

4 昨年度（平成 22 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に策定した計画にあげた、以下の 6 項目 -- (1) 文学部 F D 研修会「科学研究費研究報告・談話会」、(2) 授業参観の実施、(3) 学生による授業評価アンケート（比較文化学科）、(4) 学外セミナー等への教員派遣、(5) 授業改善のための公的試験活用（人間学科）、(6) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学

科) -- は、上述の如くすべて予定通りに実施し、計画を達成することができた。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

次年度の予定は、これまで積み重ねてやってきた如上の活動を、基本的には踏襲していきたい。

今後に向けての課題であるが、上記の項目の内実をさらに充実させることを、まずは検討したい。

たとえば授業参観であるが、いくつかの問題があって十分に有効に活用されているとは言い難い。つまり、授業を提供する教員が少ない、せっかく提供しても誰も見に来ない、参観した場合のフィードバックがない、などである。もちろん参観する側にも授業その他があって、なかなか機会があっても行けないということもあるのだが、広報も十分であったとはいえないし、フィードバックがないとただ単に見て終わりということになってしまうので、事前に担当教員と検討する必要があると思う。

また授業アンケートであるが、上に書いたとおり、アンケートの手応えを学生にいかにも実感させるかというのが、長期的・継続的に実施していく上で重要になると思う。その点での工夫を検討したい。

最後に、FD 研修から持ち帰った成果を広める学部内の講習会であるが、このような自前の講習会を通して、学部内の資質向上と FD の機運の向上に結びついていけば、それは非常に望ましいことだと考える。従って、今後もこのような勉強会を実施する機会を設けていきたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

大学 FD 委員会と協調しながら、各種研修会に積極的に参加し、教員相互の授業参観を推進する。また、専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施する。学部内では、次項目の組織メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、社会に貢献できる学生を育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長（東岸）、生物資源学科主任（小野）、生物環境システム学科主任代理（杉本）、生命化学科主任（堀）、学生主任代理（水野）、教務主任（関川）および大学 FD 委員（富田）の計 7 名が中心となり、これにあたる。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) 研修会

①概要（目的を含む）

学部内での研修会は「農学部における学士課程の質保証ならびに教職コースの方向性；(i)」「大学におけるハラスメント；(ii)」について、学部長が 4 月～8 月の拡大教授会を利用して学部所属の全教員を対象とし、実施した。いずれも講義や学生指導に活用することを目的とした。

②到達目標

いずれのテーマにおいても、現状を理解し講義や指導に活用する。

③活動内容

(i) は、理科系教員の育成を含め、学士課程在学中および卒業後の質について、学部の方向性を認識した。(ii) については、大学での各種ハラスメントの問題点などから現状を理解し、対応などを検討した。

④評価

各研修会の内容から学部としての組織的な取り組みとして学ぶものも多く、研修後には多くの意見や感想をいただき、意見交換などが活発化した。

(2) 学生による授業評価アンケート

①概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の全教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、授業評価アンケートを実施した。

②到達目標

現状の理解から講義や指導に活用し、授業改善に役立てる。また、大学 HP 上に公開する。

③活動内容

春semester81 クラス、秋semester62 クラスに対して授業評価アンケート

を実施した。ただし、実験・実習科目、演習科目ならびに受講者が10名以下の科目については除外した。

アンケート集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学HPに学部学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの自由記載欄を活用するために原本を返却した。

④評価

アンケート結果を大学HPで公開するに至った。今後は農学部HPとリンクし、結果の分析を進めたい。

表. 平成23年度の授業評価アンケート集計結果（3学科のアンケート実施科目すべて）

学期	設問	強く そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	最頻値	
春 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.212	0.414	0.322	0.046	0.006	ややそう思う	
	2 授業以外によく予習復習した	0.122	0.239	0.437	0.162	0.041	どちらとも言えない	
	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	0.312	0.397	0.246	0.036	0.009	ややそう思う	
	4 毎回よく授業の準備がされていた	0.367	0.364	0.234	0.028	0.008	強くそう思う	
	5 シラバスにそって授業が行われた	0.278	0.366	0.313	0.032	0.011	ややそう思う	
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	0.363	0.351	0.237	0.039	0.010	強くそう思う	
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	0.334	0.300	0.252	0.084	0.029	強くそう思う	
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	0.264	0.307	0.338	0.072	0.018	どちらとも言えない	
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	0.322	0.336	0.279	0.051	0.012	ややそう思う	
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	0.350	0.329	0.263	0.046	0.012	強くそう思う	
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	0.399	0.323	0.246	0.024	0.008	強くそう思う	
	12 授業全体についてよく理解できた	0.217	0.352	0.334	0.077	0.020	ややそう思う	
	13 授業の内容に興味をもてた	0.299	0.329	0.290	0.061	0.021	ややそう思う	
	16 この授業を受講してよかったと思う	0.370	0.313	0.270	0.032	0.014	強くそう思う	
	秋 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.198	0.409	0.317	0.061	0.014	ややそう思う
		2 授業以外によく予習復習した	0.113	0.238	0.429	0.165	0.054	どちらとも言えない
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた		0.317	0.388	0.247	0.038	0.009	ややそう思う	
4 毎回よく授業の準備がされていた		0.376	0.365	0.227	0.025	0.008	強くそう思う	
5 シラバスにそって授業が行われた		0.317	0.370	0.278	0.028	0.007	ややそう思う	
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った		0.393	0.363	0.199	0.034	0.011	強くそう思う	
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった		0.368	0.320	0.240	0.059	0.014	強くそう思う	
8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した		0.292	0.322	0.311	0.059	0.015	ややそう思う	
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した		0.324	0.338	0.284	0.040	0.014	ややそう思う	
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した		0.340	0.344	0.255	0.047	0.014	ややそう思う	
11 教員は毎回熱意をもって授業をした		0.407	0.339	0.227	0.020	0.006	強くそう思う	
12 授業全体についてよく理解できた		0.215	0.344	0.316	0.090	0.035	ややそう思う	
13 授業の内容に興味をもてた		0.307	0.316	0.274	0.065	0.038	ややそう思う	
16 この授業を受講してよかったと思う		0.351	0.297	0.274	0.050	0.027	強くそう思う	

(3) 教職員を対象とした公開授業

①概要（目的を含む）

教員の教育力向上のために、教員相互の授業参観を実施した。

②到達目標

この活動の実施意義を理解するとともに、教授方法などを参考とする。

③活動内容

教員相互の授業参観を実施し、全学職員にも授業を公開した。授業を公開した教員は各学科2名で合計6名であった。

④評価

農学部としては2年目の活動であり、この活動の定着のためには実施方法や活動後の活用など検討の余地が多い。参加者数も低調であった。

4 昨年度（平成 22 年度）に提案された予定・課題の達成度について

授業評価アンケートの集計結果を大学HPから外部公開することとなった。今後は過去に遡って公開することと新たな結果の公開を継続したい。また、アンケート原本を返却することで、学生自由記載欄の有効活用を試みた。

1年生の基礎学力を把握するために、新入生ガイダンスで高等学校での学習範囲について試験を実施した（生物資源学科；生物、生物環境システム学科；英語、生命化学科；化学）。これにより、基礎学力不足の学生には基礎的な科目の受講を推奨した。

今後も検討を要する課題などもある。しかし、次年度以降に継続することで従来のFD活動の充実と発展を目指したい。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

- ・ 新カリキュラムの検討
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 授業評価アンケートの集計結果の分析
- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み
- ・ 基礎学力不足の学生に対する対応
- ・ 大学院FD委員会との協調

§ 工学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が TAMAGAWA VISION 2020 を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

現状における課題への対応を充実させる。特に、24 年度入学生に適用するカリキュラム改定では、開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保されたカリキュラム構成を目指した。また、入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が課題となっている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によるものだったが、平成 21・22 年度は、マネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科が ISO9001 のシステムの運用を維持した。

平成 23 年度はマネジメントサイエンス学科のみが運用を維持した。このため、機械情報システム学科は平成 21 年度より簡易化した PDCA のサイクルを運用し、ソフトウェアサイエンス学科は平成 23 年度からこれまでの活動経験を活かした PDCA のサイクルを維持した。

学部としては ISO の活動の有無にかかわらず、FD 活動は学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。平成 22 年度から、TAMAGAWA VISION 2020 に沿う工学部教育の在り方についてこれらの組織および教授会、学科会にて検討を開始し、平成 23 年度にはディプロマポリシー・アドミッションポリシー・カリキュラムポリシーを検討し整備された。これらは平成 24 年度のカリキュラム改定に反映され、カリキュラムマップ・カリキュラムツリーも作成された。なお、全専任教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催している。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) 工学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

平成 24 年 3 月 15 日（木）14 時～17 時 40 分

学士課程における TAMAGAWA VISION 2020 の共有による FD 活動の中で、PBL 型授業が注目されている。他大学の PBL 型授業の事例紹介（専修大学ネットワーク情報学部飯田周作教授）および本学部における PBL 型授業の経過報告を実施した。また、入学生の基礎学力の現状報告も実施した。

② 到達目標

今回は特に PBL 型授業について他大学の有効な事例を知るとともに本学部の PBL 型授業の振り返りによって、今後の PBL 型授業の活用促進や改善をはかるこ

とができる。また、入学生の基礎学力の現状認識を共有して、基礎学力向上を意識して指導できるようになる。

③ 活動内容

22年度の学部FD研修会によって「学士課程における TAMAGAWA VISION 2020」が共有され、23年度に運用を開始する各学科の新カリキュラムの構成に活かされた。23年度の学部FD研修会では、新カリキュラム運用の準備に沿ったFD活動が行われた。特に、PBLとその成績評価におけるプロセス重視、並びに、入学生の基礎学力の現状について聴取した。

④ 評価

22年度の学部FD研修会を契機に工学部全教員が TAMAGAWA VISION 2020の共有と実現へ向けたカリキュラムの改定における目標・要件を確認・共有し、改定作業がなされた。開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保できるカリキュラム構成を持つことができた。必修の導入教育にPBL(プラクティスの内容)を取り入れた学科もある。

23年度の学部FD研修会では、理工系の他大学のPBLに関して、成績評価方法を含む知見を得るとともに、本学部で実績のあるソーラーカー、ロボット、環境の問題解決型授業(PBL)に関する実績や課題を共有することができた。プロセスを重視した成績評価方法等は、カリキュラム改定で導入教育に取り入れたPBLや、それに続く選択のPBL、同様な要素を持つ科目の指導計画に役立てることができた。さらに今後、PBL系の科目のみならず、実験・実習・実技系科目の実施や成績評価において活用されるとみられる。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要(目的を含む)

工学部では授業内容・方法・スキルの向上等、継続的な授業改善をはかるために、平成12年度秋学期より継続して「学生による授業評価アンケート」を実施している。

② 到達目標

工学部各学科の全教員全科目について実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

学期末最終授業または期末試験期間に実施し、集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに科目担当者に届けられる。集計結果の内容は科目担当者が作成した授業チェックシートとともに科目単位および学科単位で次期の授業に反映されるよう、PDCAを実行する努力をしている。学外には総括した内容をWebで、学内には全ての詳細を学生による授業評価報告書として校舎ロビー等で閲覧公開している。公開する報告書に掲載されている科目ごとの集計表には可能な範囲で科目担当者のコメントを記載するようにしている。

④ 評価

教員、科目とも参加率はほぼ 100%を維持できている。授業評価平均値は 3.7 前後を維持している。集計結果に対する科目担当者のコメント記載については多くの科目担当者が入力し、記載できるよう努力したい。

(3) 授業評価検討会

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価アンケートとともに教員自ら授業を評価する科目ごとの「授業チェックシート」を基にして、学科ごとに実施した「授業評価検討会」の報告を持ち寄って、学部として実施する「授業評価検討会」にて、総合的に検討を加える。検討結果は学部としての改善の実施、および各学科へフィードバックされ、学科における改善の実施に寄与する。

② 到達目標

継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。
改善成果を評価する。学科として今後必要な改善点を確認するとともに、学部として必要な改善点を提言する。

③ 活動内容

授業評価検討会実施日：春学期 9 月 15 日、秋学期 3 月 14 日

④ 評価

授業評価アンケート・授業チェックシート・授業評価検討会によって、授業改善のサイクルが定着している。組織としての活用が継続的課題となっている。

(4) 学習支援

① 概要（目的を含む）

主に 1 年生を対象とする基礎学力向上のために実施している数学・物理学の「学習支援」は、開始 4 年目を迎え、活用した学生の単位取得率が高い等の効果は表れているが、活用率を向上させることが課題となっている。

② 到達目標

- ・ 活用率の向上
- ・ 支援の充実

③ 活動内容

数学では教科科目の小テスト不合格者指導および再テスト実施と評価の連携を推進した。物理学では同時に指導する対象学生数を個別指導可能な範囲に限定し、実施日時限をクラス別に設定した。物理学の学習支援については例年応用物理学会にて実施効果を含めて報告されている。

④ 評価

教科科目との連携により出席率は向上し、出席率の高い程成績向上の成果がみられ、支援の充実度は増している。また、教科科目担当教員とチューターの連携・打ち合わせに留意して支援を効率よく行っている。一方、学習意欲が低く出席率が低い学生のモチベーションの向上が課題となっている。ただし、チューターと

して適切な高校教員 OB の補充が困難な状況にある。

(5) 発達障害学生支援

① 概要（目的を含む）

発達障害あるいは発達障害とみられる学生の入学事例が毎年みられ、対応を模索しながらの支援・指導は 3 年を経過し、学外実習、卒業研究および就労が課題となっている。

② 到達目標

当該学生の就労や将来を意識した支援・指導の在り方の目処を立てる。

③ 活動内容

- ・ 実験実技科目を中心に指導補助員を充当し、対応している。
- ・ 学科専門科目については科目担当者に理解を求め、指導上の配慮をお願いしている。
- ・ 対象学生の状況に応じて学内の特別支援教育専門家や健康院カウンセラーの助言を得て支援・指導を実施している。
- ・ 発達障害学生支援を先行して実施している他大学の例を参考に本学の学習環境・制度を考慮して指導方針をたてている。
- ・ 学生本人はもとより保護者とのコミュニケーションを良好に保ち、情報を共有している。
- ・ 本人の就労や将来を考慮した指導を行っている。
- ・ 診断を受けていない場合は、診断を勧めている。
- ・ 診断を受けるに至った学生の場合、保護者を通じて医者に大学での学生の状況を報告して大学側として必要な対応について助言を求めることもある。

④ 評価

対象となる学生の進級・卒業や新入学による指導経験を重ねること、および、学内外の発達障害学生に関わる研修参加によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。当該学生の現状と今後や将来を考慮した指導を基本に、インターンシップや卒業研究の指導実績が得られている。インターンシップの受け入れ先の確保、就労に関しては当該学生および保護者の現状認識を高める良いきっかけとして捉えて対処することにより、就労に関する保護者の理解と協力が得られるもあるが、理解が得られない場合の就労指導対処が課題となる。

(6) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における課題あるいは今後のカリキュラム改定にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を活用する。

② 到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

③ 活動内容

○FD ワークショップ「PBL による学びの改善」（主催・会場：法政大学理工学

部、開催日：平成 23 年 7 月 2 日)

○PBL 教育フォーラム「学生のやる気を引き出す PBL (実践的な学習をサポートする支援としかけ)」(主催・会場：同志社大学、開催日：平成 23 年 10 月 22 日)

○FD フォーラム「大学におけるキャリア教育を考える」(主催：大学コンソーシアム京都、会場：京都産業大学、開催日：平成 24 年 3 月 3,4 日)(分科会：「発達障害のある学生への組織的支援を考える」)

○「技術者に求められる社会人基礎力」調査(卒業生の技術者・採用担当者の講演聴取および聞き取り)

④ 評価

例年、工学部 FD 研修会にて参加報告を実施しているが、今年度の工学部 FD 研修会では PBL や基礎学力に関する内容にあてたため、報告の機会がなかった。必要に応じて、学科会における報告や個別の報告、回覧等により、発達障害学生支援やカリキュラム改定の一部に活用されている。活用例としては、カリキュラム改定で新たに開講した専門導入教育としての「PBL I」、専門知識以外の基礎力養成のための「技術者に求められる社会人基礎力実践演習(心の教育実践センターの協力を得て開講)」等が挙げられる。

(7) 学内研修会等への教員参加

① 概要(目的を含む)

学部の授業の健全運営と質の向上のためには個々の教員の授業力によるところが大きい。このため学部の教員が学内の研修会に参加して、資質や授業力の向上をはかることが望ましい。

② 到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

③ 活動内容

研修会名・開催日・工学部教員の参加者数(非常勤を含む)は次の通り。

○シラバス(学習支援計画書)について—金沢工業大学の取組(10月28日)10名

○学生の学習を促すシラバスの書き方(11月28日)9名

○学生の理解を重視する大学授業(12月16日)2名

○発達障害のある学生への対応(1月18日)8名

参観授業：参観教員が極めて少ない中、参観授業の回数を減じたが、参観教員が極めて少ない状況は変わっていない。

④ 評価

個々の教員の授業力および資質の向上をもたらし、授業の健全運営と質の向上に寄与しているものと推察される。

4 昨年度（平成 22 年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）TAMAGAWA VISION 2020 の実現へ向けた課題

カリキュラムの改定を実施する。開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保されたカリキュラム構成を目指したカリキュラム改定がなされた。

（2）現状における課題

入学生の学力不足対応指導は高校教員 OB のチューターと専任教員の連携により、成果を挙げつつあるが、定年退職されたチューターの補充ができず、支援対象者数を限定せざるを得ない状況が続いている。

発達障害者支援については、現在の環境下での卒業までの対処の在り方に目処が立ってきた。就労、保護者の理解や、医者との連携（二次障害の防止策等のため）等が課題となっている。

（3）FD 活動の在り方に関する課題

授業参観（研究授業）の参観者数が毎回 1 から 3 名程度であり、低迷している。対象となった科目担当にとっては参観者のある限り、改善に有益であるものの、組織としての効果的な授業手法等の共有の観点からは望ましい状況ではない。昨年度から、全学で参観者が全学部教員および職員を対象とする参観授業も設定されているが、工学部参観授業への学部外からの参観者は 1 回のみ 1 名であった。参加のための時間をとることが難しいという声も多い。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

（1）TAMAGAWA VISION 2020 の実現へ向けた課題

16 単位制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、充実した指導の在り方が課題となっている。

（2）現状における課題

前項の課題に沿って、入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

（3）FD 活動の在り方に関する課題

参観授業（研究授業）や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が課題となっている。

§ 経営学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあつて、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、観光経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって 2 学科合同の FD 活動を実施する。FD 担当と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として学生主任（FD 担当を兼務）、大学 FD 委員が研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) 経営学部 2020 ビジョンの策定とプログラム運用に向けた検討

①概要（目的を含む）

TAMAGAWA VISION 2020 に沿って、経営学部の教育課程及び 2020 年までのロードマップを新たに構築する。

②到達目標

研究・教育の視点から経営学部のビジョン、ミッションを策定し、ビジョン、ミッションに沿って初年次から二年次以降の教育につなげる課程及び各科目の授業内容を構築する。

③活動内容

経営学部 2020 ビジョン、初年次教育の 2 つのワーキング・グループを設けて月 1 回程度の会議を開催し、検討を重ねた。まず経営学部のビジョン、ミッションを策定し、学科別にコースまたは履修モデルを設定した。そのうえで専門科目（一部の US 科目を含む）の授業内容を具体的に検討するとともに、専門科目及び IT スキルの支援体制、検定試験合格助成制度を設けた。平成 24 年度から運用を開始し、ロードマップに沿って 2～3 年ごとに見直す。

④評価

平成 24 年度新入生の二年次以降の具体的な授業内容を中心に引き続き検討する。一部の専門科目では英語で授業を実施する。それを見据えて英語プログラムと専門科目との接合を図る。授業評価アンケートで学生の学習時間が十分ではないという結果が出ていることを受けて、自学自習を促す仕組みをいかに構築するかも課題である。

(2) 大学コンソーシアム京都主催 第16回FDフォーラム参加報告

①概要（目的を含む）

6月23日に組織的なFDの進め方について理解を深めることを目的として実施した。FDが強く求められて以来、教員が個々にFDを進めることが多いという指摘もあるなかで、いわゆるミドルレベルのFDを取り上げている。

②到達目標

- ・教員個別のFDに加えて、組織的なFDに取り組む方法を具体的に述べる。
- ・Blackboardを活用した授業で、学生の自学自習を促す方法を提案する。

③活動内容

飯野峻尾教授からのシンポジウム及び教育手法としてのeラーニングの可能性に関する報告に基づいて、さまざまな取り組みの効果、課題を共有した。

④評価

Blackboardを使用している科目が多いなかで、eラーニングが自学自習に十分につながっていない点は共通する課題として共有された。各種ワークショップに各教員が積極的に参加する体制を整備するとともに、アンケートの活用方法を十分に検討する必要があるという意見があった。

(3) 国内・国外研修派遣（教育研修）報告

①概要（目的を含む）

10月27日にグローバルな視点からPBLについて理解を深めることを目的として研修会を実施した。参加者でTransborder Project-based Learningの実践事例を共有した。

②到達目標

海外における事例を含めて、教員と学生が協同してPBLを進めるための具体的な取り組みを知る。

③活動内容

まず大金教授からプロジェクトへの参加の目的、参加者について報告があった。続いてProject-based Teaching and Learningという枠組みで、大金教授が参画している明星大学サマースクールプロジェクト(MSSP)を紹介するとともに、さまざまな提案や取り組みとそれらの成果について、活発な意見交換がなされたという報告があった。

④評価

学習環境の多様化が進むなかで、たいへん興味深く大きな可能性を感じさせるという意見が寄せられた。教員と学生が連携して実践しているという点でも学ぶべき要素が多い研修会であった。

(4) 講演・ワークショップ

①概要（目的を含む）

3月1日に「学習成果を高めるグループワークについて考える」と題してワークショップを実施した。各教員がLTD(Learning Through Discussion)による授業を

通して、グループワークによる授業の成果をあげるための手段を考える研修である。

②到達目標

- ・LTDによる授業実践を通して、この手法のメリット・デメリットを明確に指摘する。
- ・各教員が担当する授業を念頭に置いて、グループワークを円滑に進め学習成果を高めるために有効な手段や留意点を提案する。

③活動内容

法政大学文学部の藤田哲也教授を講師に迎え、LTD学習法について二部構成で研修を進めた。まず講師から本務校における実践についてお話しいただき、それに基づいて教員はLTDによる授業を体験した。教材も実際の授業で使用しているものであった。後半はミラーリングを取り入れながら、学習成果を高めるグループワークをどのように運用するかをさらに検討した。

④評価

3月に実施したこともあって、研修後にはさっそく4月からの授業で取り入れるという声もあった。同日午前には下記のハラスメント防止研修会があったため、長時間にわたる研修になったものの、集中したグループワークであった。授業によって他の授業方法が望ましい場合もあるため、今後、その他のさまざまな手法についても目を向ける必要がある。

(5) ハラスメント防止研修会

①概要（目的を含む）

3月1日に大学におけるハラスメント防止を目的に実施した。昨年度に続いての実施であるが、新しい教育課程の運用では学外での授業や学生指導の機会も増えることが見込まれるため、新年度を目前に控えた時期を設定した。

②到達目標

ハラスメントのない環境の整備を一層推進するために、ハラスメントがもたらす影響について理解をさらに深める。

③活動内容

桑島英美弁護士を講師に迎え、民間企業や大学におけるハラスメントの事例、ハラスメント防止に向けた組織的な取り決めの効果などについてお話しいただいた。昨年度に続いての研修であったが、今年度はさらに具体例を交えた研修内容であった。

④評価

事例による講義に時間を充てたため、注意すべき点がより明確になった。質疑応答では担当授業、担当業務でのハラスメントの未然防止に努める方法について踏み込んだ助言もあった。

(6) 学生による授業評価

①概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度は秋学期のみの実施である。全学的にアンケート項目を変更したことを受けて、経営学部でもマーク形式の質問項目を見直した。

②到達目標

学生の学習状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除くすべての科目でマーク形式、記述形式の授業評価アンケートを実施した。

④評価

FD 担当教員よりマーク形式のアンケート結果を各科目担当教員に配付し、各教員の FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。今回のアンケートでは学習時間に関する項目を設定しており、学生の学習時間が少ないという結果であった。この点については新たな教育課程の運用において、次年度以降も検討すべき課題である。

4 昨年度（平成 22 年度）に提案された予定・課題の達成度について

経営学部 2020 ビジョンに基づく新たな教育課程の編成に多くの時間を充てたが、今年度のその他の各活動においても十分な成果をあげることができた。

全学的な取り組みの一環として、昨年度に引き続き授業参観を実施した。今年度は秋学期に開講している 4 科目とした。講義を中心とした科目、演習を取り入れた科目など、授業方法はさまざまであるが、科目の特性にあわせて各教員が個別に改善を試みていた。

FD フォーラム(大学コンソーシアム京都主催)への参加は概ね例年通りであった。3 月 3・4 日の 2 日間、京都産業大学で開催された第 17 回 FD フォーラムには 2 名が参加した。平成 24 年度春学期にこのシンポジウム及び分科会の報告を含めた研修会を開催する予定である。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

平成 24 年度から新たな教育課程の運用が始まり、経営学分野の専門性が高まる。各教員がそれぞれに FD を続けることはもとより、新たな教育課程を基礎としたミドルレベルの FD が重要になる。具体的にはビジョン、ミッションを達成するために、コース別 FD や履修モデルに即した FD といった取り組みが考えられる。平成 24 年度はこれまでにない学習支援体制で臨むため、学習支援室の活用状況とその成果も FD につなげたい。

これまでの FD はいわゆる教育活動が中心になっていたが、経営学部 2020 ビジョンでも掲げているとおり、教育活動とのバランスを取りつつも FD における研究活動の比重が高まることになる。したがってこれまで以上に研究成果に結びつける FD を展開しなければならない。そのため研究時間を確保したうえで、担当科目数の調

整といった組織的な取り組みが求められる。

授業評価アンケートのあり方、とくにアンケート結果の活用方法は課題である。現在のところ各教員がFDにつなげているが、今後は科目やコースなどを1つの単位として科目担当者が連携を図ることで、さらなる授業改善を図ることができると見込まれる。この点については平成24年度以降、上記ワーキング・グループでの議論も検討する。

§ 教育学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度の FD 活動への取り組み理念・目標は、平成 22 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、大学・学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、教務担当及び FD 委員（教務担当兼務）、通信教育学部長、教務主任、学部 FD 委員の 13 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画(企画・運営)の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また、委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 平成 23 年度の活動内容

【通学課程】

(1) 自校史教育の研究 「玉川教育を再考する ～小原國芳生誕の地を巡りながら」

①概要（目的含む）

近年、自校の歴史や建学の精神を学ぶ「自校史教育」を実施する大学が増加しつつある。2006 年 5 月 21 日付の『産経新聞』によれば、九州大、名古屋大、東北大、北海道大、青山学院大、関西学院大、慶應大、上智大、明治大、早稲田大などにおいて、「自校史教育」に相当する授業科目が設置されているという。

また、名古屋大学においては、初任職員研修でも自校史講義の時間を設けている。これらの自校史を実施する理由の一つとしては、その建学の精神を学生や教職員に周知することが挙げられる。とりわけ、私学においては、創設者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有しているか否かは、大学教育の成果に大きく影響すると考えられているからである。

本学でも、「全人教育論」をはじめとして、学生たちが創立者小原国芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事などで多数設けている。このような状況下において、本学の教員が創立者の生誕地である鹿児島県を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義があり、今後の大学における教育活動にも大きく寄与することが期待できる。特に、昨今の新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは、玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。そこで、将来の全学 FD 的な研修プログラムの開発を視野に入れつつ、本研修を企画するものである。

②到達目標

- ・創設者小原國芳の生誕の地を巡りながら、玉川大学の建学の精神を確認し、学び合い、今後の教育活動、研究活動の活性化をはかる。
- ・学部内での報告会を行い、学部教員の玉川教育への士気を高め、授業内容や学生指導に反映させる。

③活動内容

- ・鹿児島県南さつま市坊津町久志などの実踏研修

宿泊研修 : 平成 23 年 7 月 10 日 (日) ~ 12 日 (火)

参加者 : 専任教員 11 名

研修内容 : ・生誕地跡の見学、廣泉寺での墓参 (旧職員の講話)

・久志小学校、久志高等学校跡の視察

・学園付属施設である久志農園の視察と職員との交流

・鹿児島県 神村学園教職員との交流会

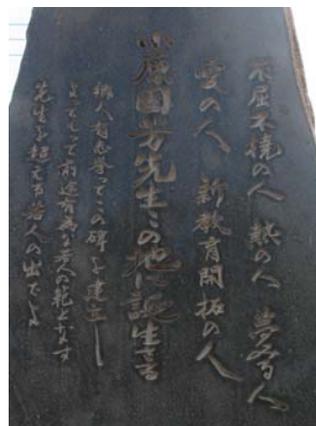
・福岡県 中村学園大学訪問

- ・研修報告を通しての学部内研修

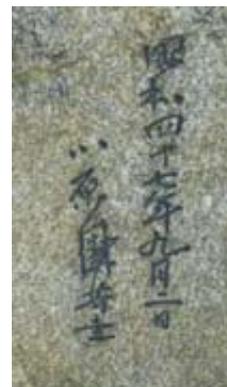
日 時 : 平成 23 年 9 月 28 日 (水) 学部教授会終了後 (45 分)

内 容 : 報告・質疑応答・意見交換

<写真による報告>



生誕地跡のメモリアルパーク (鹿児島県南さつま市坊津町久志)



学校法人 中村学園の石碑にある小原國芳の書 <石碑表>

<石碑裏>



学校法人 中村学園のホールに掲げられているに小原國芳の書
(学校法人 中村学園 所在地 : 福岡県福岡市城南区別府)

<研修参加者の報告内容>

以下、研修に参加した新任教員の報告書よりコメント抜粋し、列記する。

- ・「全人教育」をはじめとする小原の教育信条は、玉川大学に来てからの学生との付き合いや諸先生方との懇談、また、伝統ある種々の学園行事等を通じて、教員としての私の心の中にひそかに根付くこととなるが、昭和の偉大な思想家にして教育者、そして本学の創始者でもある小原先生の生誕の地やゆかりの地を、FD研修の一環としてわずか着任2年目の夏に訪れることができたのは極めて僥倖なことであった。
- ・玉川学園にゆかりの薄かった者でも、かの偉大な教育者の足跡や教育信条への理解が深まったのである。
- ・創設者の生誕の地を巡り、生い立ちを知る事で、創設者が幼少時から苦学して成長したことがより鮮明に感じられた。富裕層を除き、中等教育以上の機会を得ることが困難であった近代学校制度の中で、志ある若者が自己実現を果たすことがいかに苦難の連続であったかがよく分かった。
- ・近代日本において、創設者が自らの理想である「全人教育」を掲げて新しい学校を創設

し、全国から有為な若者を集め、その夢の実現を支援しようとした事の意義を改めて感じさせられた。

- ・自校史を辿る貴重な機会となると同時に、鹿児島県の歴史及び地方教育史に関する知見や資料を得た事は、日本史・日本教育史の授業を担当するうえで一定の成果となった。
- ・授業の際に玉川学園創設時の話をする機会があり、研修時に見学した生家跡や久志、鹿児島市内の話を変えて、より具体的な授業をすることができた。

④評価

2泊3日に亘る研修において、参加した教員ひとり一人が、久志の地から教育への情熱を絶やさず精進され、今日の学園の隆盛までを導かれた創設者小原國芳先生のご功績と偉大さを改めて知ることができ、各々の教育活動を見直す機会になった。また、ご生誕の地において久志出身の旧職員（高尾氏）の講話を通して、書物には載ることの少ない久志地区で伝わるご功績なども伺い、玉川教育の源となるエネルギーを感じ取ることができた。また、学校法人中村学園にまだ掲げられている小原國芳先生の書を以て、改めて教育界への影響力の大きさを再認識する機会となった。研修を通して衣食住を共にすることで教員間の懇親を深めたり、意見交換が盛んになされたりし、玉川信条における24時間の教育、塾教育の意義をも再考する機会になった。

研修で見聞したこと、写真資料は、各々の授業で活用されたとの報告もあり、教育への還元されたことも証明され、研修としての一定の意義を見出せたと評価できよう。

(2) 初年次教育の在り方と基礎学力の保障と向上の研究

①概要（目的を含み）

学士課程教育の基礎となる一年次セミナー101、102における教育内容と方法の検討を行い、学士力の豊穰を目指すものとする。また、学士として、また教職課程を受講するものとしての基礎学力の保障と向上に関する研究を行う。

②到達目標

- ・一年次セミナー101、102における教育内容と方法の改善を図る。
- ・基礎学力の保障と向上にかかわる教育活動の意義を検証する。

③活動内容

○一年次セミナー101、102における教育内容と方法の改善

- ・1年次担任による研究会の実施：春学・秋学期共に3回 計6回
テーマ：・教育内容と方法の検討
・入学式直後の宿泊研修の意義と内容の検討

○基礎学力の保障と向上にかかわる教育活動の意義の検証

- ・過去数年の教育活動の分析と研究発表
- ・初年次教育学会での研究発表（2発表：3名参加）

平成23年8月31日～9月1日 於：久留米大学

大谷千恵：検定制度を利用した教育学部生への英数国の基礎学力定着の試み

富永順一：検定制度を指標とした入学前教育から専門教育への一貫した
基礎学力育成の実践

④評価

以下のことにより、到達目標をほぼ達成したものと評価できる。

- ・一年次セミナー101、102における教育内容と方法の改善
教育内容と方法については、数回の研修を通して、個々の担任の個性を活かしながらも教育内容の標準化を図ることができた。また、宿泊研修については、入学式直後の実施から4月末に変更し、2年生の学生スタッフを登用した形で大学生活の安定と活性化を目指す内容へと変更することになった。ともに改善への一歩を踏み出し、改善活動として一定の評価ができる。
- ・基礎学力の保障と向上にかかわる教育活動の意義の検証
初年次教育学会での口頭発表において多くの質問を受け、本学における教育に高い関心があったとの報告がなされ、研究活動としての評価を得たと考える。

(3) 二年次教育の在り方についての研究

①概要（目的を含む）

二年次教育として位置づけているキャリア演習Ⅰ・Ⅱの教育内容と教育方法の検討をする。殊にキャリア形成にかかわる卒業生を登用したガイダンスの在り方と学士力として求められるコミュニケーション能力の育成、教職に就く者として求められる自然体験、野外活動体験をいかに保障するかを検討する。

②到達目標

- ・キャリア形成にかかわる卒業生ガイダンス内容の改善を図る。
- ・2年次秋に実施している宿泊研修の改善を図る。

③活動内容

二年次担任による研究会を実施：春学期3回、秋学期4回

○教育内容の改善について

- ・PBL型学習方法を用いた環境教育の展開（労作活動・食育活動）

○キャリア形成にかかわる卒業生ガイダンス内容の改善の会議

- ・2年次から3年次につながるキャリア意識の形成にかかわる教育内容に検討、卒業生登用のガイダンスの在り方を検討した。
- ・卒業生ガイダンスにおける卒業との打ち合わせ会、反省会を実施し、研修内容の充実を図った。

○2年次秋に実施している宿泊研修の改善の会議

- ・従来行ってきた箱根での研修の見直し、研修目的の再策定、内容の検討、内容に応じた活動場所、スタッフの課題を検討した。

→ ・自然体験と野外活動体験を保障し、コミュニケーション能力の育成を図ることを主たる目的とし、活動場所・スタッフを変更した。

<平成24年度の計画>

活動場所：埼玉県野外活動センター

外部スタッフの登用：小学館集英社プロダクション

④評価

新しい試みとして展開した PBL 型の学習の環境教育の結果、学生の主体性のある活動が窺われ、教育内容の方法の効果があつたと考える。また、卒業生登用のガイダンスも講話の前後に打ち合わせ、反省会の強化を図つたことで有意義なものとなつた。さらに、宿泊研修の改善に至つては、これまでの教育実践の反省、新たな学生支援の課題を鑑み、新しい展開への一歩を踏み出すことになつた。このようなことから、二年次教育の改善にかかわる研究が進み、到達目標を達したものと評価できる。

(4) 学生による授業評価アンケート

①概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）の実施促進を図るとともに、実施後の活用方法を検討する。また、実施後の集計を外部委託し、さまざまな分析が可能なデータの集積を進める。

②到達目標

- ・専任教員が担当する授業においては講義科目を中心に学生によるリフレクションシートを積極的に実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善につなげる。

③活動内容

例年、春学期、秋学期共に実施しているが、東日本大震災の関係で 23 年度は秋学期のみの実施とした。また、教育学部としての授業評価の意義の検討と今後の実施方法の検討を図つた。

- ・秋学期のリフレクションシートの実施率は 71.4%、外部集計委託は 19%であった。（前年度：春学期 50%、秋学期 78.5%）
- ・授業評価にかかわる検討会議：3月14日
- ・教育学部の授業評価（リフレクションシート）実施の義務を決定し、専任、非常勤共に各学期、各授業にて実施することとなつた。また、外部集計委託も行い、授業評価の公表も行うこととなつた。
- ・リフレクションシートの内容の検討、公表の方法と内容、教員へのフィードバック後の検証などは継続審議することとなつた。

④評価

授業評価としてのリフレクションシートの実施率は、前年度に比して減少したことは残念であるが、その結果を含め、教育学部としての授業評価への取り組みの意義、今後の展開について議論することができた。その結果、これまで意義の共有化が難しかった授業評価とその公表の方法に方向性を見出すことができた。達成目標に対して年度内の達成には難しさが残つたが、次年度以降につながる活動となつたことは評価できることと考える。

(5) 教職員相互の授業公開と参観

①概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また、関連する教科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

②到達目標

全学 FD 委員会の提案に合わせて、5人の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へも寄与する事業とすることとする。

③活動内容

教育学科の教員2名、乳幼児発達学科の教員3名の協力を得て、5つの授業において授業公開と参観を行った。結果、参観のあった授業は2つであり、実施方法の課題が明らかになった。以下、授業公開の協力を得た教員のコメントを抜粋し、列挙する。

<コメント>

- ・参観者から授業内容に関するコメントをもらうことでその内容を協議し、教授内容の位置づけを再確認した。
- ・普段通りの、そして学生のありのままの姿をみていただいたことや担当者としての授業の工夫について、意見をいただけた点は、メリットである。
- ・授業終了後、授業のねらいや運営の仕方等について、補足をおこなうとともに、授業の内容と方法について、参観していただいた方からの質問に応える形で、授業のねらいや運営の仕方等について、話し合いを行った。ただの参観で終わるのではなく、このような取り組みは必要だろう。
- ・参観していただいた方の一部とは、授業前にかなり細やかな意見交換の時間を設定できたが、それがすべてではなかった分、授業前後の担当者の取り組みや意図を十分に伝えられたかが明確でない点は、デメリットである。
- ・授業公開の実施に関する案内方法や実施日時の調整を検討する必要があるだろう。
- ・教員同士が互いの授業を参観するうえで気が引ける部分もあり、精神面での障壁をいかに乗り越えるかという課題を検討しなくてはならないだろう。
- ・今後の授業公開の展開に関しては、①授業参観前のディスカッション（情報交換等）、②授業参観、③授業後のディスカッション（意見交換・質疑応答等）の3つをセットにした形での実施を検討していただきたい。

④評価

平成22年度年度より、全学FD委員の提案により、実施していた本事業であるが、2年目にして教員間の意識が薄れてしまったことが残念である。授業公開日と内容の周知の方法を工夫するとともに、公開日の設定の仕方、公開前後の協議のもち方、事業内容の意義、目的に合わせた方法を再検討する必要があることが明確になった。次年度以降の課題とする。

(6) TAMAGAWA VISION 2020 の展開に伴う教育カリキュラムの検討

①概要（目的を含む）

教育学部の教員が TAMAGAWA VISION 2020 を共有し、その課題に向けて教育環境と内容の改善を図ることを目的とする。

②到達目標

教育学部の使命とする教員養成、資格取得にかかわる法的な根拠を踏まえつつ、本学の私学としての独自性を活かした展開しようとする新しい大学の在り方の中で、いかに教育活動を展開するかを検討することとする。

③活動内容

- ・ TAMAGAWA VISION 2020 の第一歩となる、大学全体の教育システムの改善となる、「16 単位制限の導入」に伴う教育職員免許状の取得カリキュラムの検討を試みた。秋に第 1 次案を作成したが、全学の実施条件の調整を踏まえ、継続審議とした。
- ・ 上記のことを踏まえ、3 年次教育実習の導入をも検討をしたが、教員養成に関する中教審の審議事項、教員養成カリキュラム（修学年限含む）の国家動向を見定める必要があり、継続審議とした。

④評価

今年度の活動はいずれも継続審議となったが、審議の過程で教育学部の教員全員が TAMAGAWA VISION 2020 への課題を共有できたこと、また、学部のアドミッションポリシー（AP）、カリキュラムポリシー（CP）の再確認、再構築する足がかりを作ることができたことは、高く評価できることである。

(7) 学内研修会への教員参加

①概要（目的を含む）

高等教育の課題の理解と新しい展開を知り、自己の教育活動・研究活動の研さん、授業改善への示唆を得ることを第一義とし、学内で開催される FD 研修会への参加を活性化させる。

②到達目標

- ・ 研修会への参加を促進させる。
- ・ 研修で得た知見を個々の教員の授業運営、教育活動に反省させる

③活動内容

学士課程教育センターが実施する学内 FD 研修に多数の教員が参加した。
以下、参加した教員のコメントを列記する。

<コメント>

- ・ FD 研修に進められて参加したが、他大学での取り組みの中に、本学も学ぶべきところもあり、鵜呑みにするのではなく、本学として何が大切で、どう取り組むのかを慎重に議論して新しい教育活動を創造していかななくてはならないと考えた。
- ・ シラバスという概念を再確認し、自らの授業へも生かそうと考えた。
- ・ 発達障害の学生支援にかかわる研修会は、障がい理解だけにとどまらず、大学の実践の中でどう支援するかという具体的な話があり興味深かった。

- ・発達障害の学生支援として、大学がすべきことは、「単位修得のためのハードルを下げることでなく、皆と同じハードルを乗り越えるための援助をどうするかが大切」という話を聞き大学教育の本質を崩すことではないと安心すると同時に、その支援が教員個人に課されすぎないように、大学としての組織的なシステムづくりの取り組みが必要であることを痛感した。

④評価

参加した教員のコメントより意識改革、課題発見の場となり、各自の教育活動に反映されることが推察され、また今後の展開が期待されることから、事業としての一定の意義を見出すことができたという評価ができる。

(8) 学外セミナー等への教員派遣

①概要（目的を含む）

教育学部の FD 活動の促進を図るため、外部機関が開催する研修会、フォーラムに参加し、外部の動向を把握する。また、外部動向については教員研修会、教授会などで報告し、共通理解を深める。

②到達目標

公益財団法人 大学コンソーシアム京都主催 第 17 回 FD フォーラム」、または、京都大学高等教育研究開発推進センター 第 18 回大学教育研究フォーラムに参加し、他大学の先駆的な教育活動、FD の実践の情報を収集し、学部の教育改善、FD 活動に寄与するものとする。

③活動内容

○教員派遣（その 1）

派遣先 : 大学コンソーシアム京都 主催 第 17 回 FD フォーラム
 開催日 : 平成 24 年 3 月（予定）
 派遣者 : 宮崎 豊（学部 FD 委員）
 派遣後の報告 : 教授会にて報告

○教員派遣（その 2）

派遣先 : 京都大学高等教育研究推進センター
 第 18 回大学教育研究フォーラム
 開催日 : 平成 24 年 3 月（予定）
 派遣者 : 宮崎 豊（学部 FD 委員）
 派遣後の報告 : 教授会にて報告

④評価

全国的な FD 活動の実践、研究動向の知見を得ると同時に、他大学の FD 事業に携わる教職員の方との交流から、大学教育における FD の課題と実務上の工夫などを知ることができた。教育学部としての FD 活動の展開に反映させることのできる視点を獲得することができた点では目標を達成したと評価できる。また、次年度以降は、FD 委員以外にも学外研修への参加することも可能となるシステムが構築でき、今後の展開が期待できる。

（通学課程報告 文責：宮崎）

【通信教育課程】

(1) 通信授業（テキスト履修）シラバスの発刊

自宅でのテキスト学習を支援するために、本年度からテキスト履修用シラバス（全 377 頁）を発刊した。シラバスは、科目の全体像を一覧の形で示したもので、通信授業を受けるために有用な情報を明示したものである。試験範囲が原則「全範囲」となるのに伴い、テキスト学習のポイントを明らかにし、科目試験に対するアドバイスも記載されている。

(2) レポート添削指導担当教員への確認事項

通信学生の満足度の一つに、レポート添削での「批評内容」がある。そこで、レポート添削指導担当教員に対して、通信教育部長名で、レポート添削指導についての留意事項が細部にわたって記されている文章を配布し、担当教員の心構えと添削指導方法を確認し、共通理解をはかった。

(3) 授業公開

通信専任教員が担当する通学生用授業を公開した。

(4) 夏期スクーリング授業への授業アンケート調査の実施

毎年行っている内容であるが、今年の夏期スクーリングを担当している教員一人あたり 1 授業に当たる、80 件の授業に対して授業アンケートを実施した。アンケート結果は、授業担当者にフィードバックしたほか、全体の集計結果を玉川通信にも掲載し学内外に周知させた。

(5) アンケートの実施

学生が何に期待しているか、また、本年から実施したシラバスの有効性等を確認するために、冬期スクーリング参加者を対象に玉川大学通信教育部への入学目的等のアンケート調査を実施した。入学/編入学の目的は、複数回答であるが小学校免許取得が 78%、卒業資格 19.1%となっている。また、玉川大学の理念及び目的について事前に 84.3%が読んでいることが分かった。シラバスに関しては、78.8%が学習するポイントが分かりやすい等の理由でテキスト学習とレポート作成に役立っていると回答している。ただし、科目試験に関しては 57.1%が役立っていると回答したのみで、シラバスの記述に改善の余地が残されていることが分かった。

なお、このアンケート結果は、来年度に玉川通信を通して学内外に公表の予定である。

(6) 教員と事務との合同研修会の実施

より良い通信教育の実施に向け、今年度初めて教員と事務との合同研修会を 2 回実施した。一つは、近年、通信学生の減少が見られるため、その実態と要因について、過去からのデータを基にした分析が事務方から行われ、それ

らを基に検討した。もう一つは、今後の通信教育のあり方を探るべく、大学における E-Learning の設計と運営を行っている企業の担当者を講師にした勉強会を開催し、E-Learning 導入の効果とその留意事項について研修した。

(通大課程報告 文責:守屋)

4 昨年度（平成 22 年度）に提案された予定・課題の達成度について

<学生による授業評価（リフレクションシート）について>

授業評価全般に亘る意義の共有化、改善の方向性を見出すことができ、大きな進展となった。実施方法、結果公開、教員の課題共有をさらに審議しつつ、新展開を試みることとなった。

<初年次教育・二年次教育の改善と研究>

これまでの日常での教育活動の見直し、改善に加え、宿泊研修の在り方についての検討を重ねた。宿泊研修に関しては、両学年とも、学生の実態と教育活動の目的をとらえ直し、新展開をすることとなった。教育研究の活性化の証であると考えている。

<授業公開と参観>

実施 2 年目であるが、運営に大きな課題を抱えることとなった。授業公開と参観の目的を見直し、目標が達成されるような実施方法の構築が急務となった。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

平成 23 年度に引き続き、本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用についての模索を重ねる。同時に、その発展・更新をも図るものとする。また、本学部の使命である、教育・保育専門職業人の養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える人材輩出のための研究と教育実践を促進する。本学の建学の理念に基づくも、今日の社会の要求に応じることのできる学部の形成をめざし、さらなる努力を重ねた FD 活動を推進する。具体的な取り組みは以下の通りである。

- ・学生による授業評価(リフレクションシート)の取り組み全般に改善に取り組む。
- ・TAMAGAWA VISION 2020 を共有化した教育学部での教育への挑戦を審議する。
- ・FDにかかわる教員研修会を実施し、学部の新たなる FD 課題を明確にする。

具体案)・教員養成と発達障害

- ・大学教育における成績評価 ～絶対評価と相対評価の問題～

§ 芸術学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- ・芸術学部のミッション、すなわち「芸術による社会貢献」の意図を全ての教員が理解し、それを実践する人材育成を行うための方策を探求する。
- ・3 学科それぞれの特性を活かした独自のカリキュラムに加え、学科を越えた教育連携の実現を意識したカリキュラムを併せて設定する。これによって「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・「芸術による社会貢献」達成のための具体策として、学生が多様な職業に対する関心と理解と深めるようなキャリア教育の充実を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を強化し、就職説明会および各種試験などの企画を進める。こうした教育プログラムを進めるため、各担任が連絡を密にし、問題意識を共有できるよう、教員研修を行う。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心に主任会のメンバーがこれにあたる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。大学 FD 委員は他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行い、拡大教授会において報告する。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) 講演会の開催 - 教員の FD に係わる授業成果向上を目的とする

①概要 (目的を含む)

芸術学部の授業成果向上 (質の保証を見据えて) を目的とした講演会を行う。これによって本学部の教員による新たな教育プログラムのあり方を議論し、教師力の向上を促す。

②到達目標

玉川大学芸術学部の教育目標を達成することを目的とした教員の教師力向上のための啓発を目標とする。

③活動内容

下記の日程で講演会を開催した。

実施時期： 11 月 5 日 (土) 10:00~12:30

場 所： 本学視聴覚センター104 教室

テ ー マ： 文化立国とクールジャパン

「日本の文化政策と芸術教育のビジョン」 玉井日出夫

「ジャポニズムとクールジャパン—グローバルズムと日本文化—」 三井秀樹

講 師： 本学教授 玉井日出夫・三井秀樹・梶原新三・中村慎一

司 会： 本学准教授 小倉康之

④評価

本学および他大学の教員、高等学校の教員、学生およびその家族など約 100 名が参加した。本学芸術学部が推進しているクールジャパン研究をどのようなかたちで教育に活かしていくのかについて、本講演会を通じて問題意識を共有することができた。

(2) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

①概要・活動内容（目的を含む）

平成 23 年度は年 2 回の授業アンケートを予定していたが、震災の影響で春学期授業アンケートの実施を見送った。秋学期は予定通り、芸術学部で開講している全て授業について授業アンケートを実施した。個々の科目に関するデータおよび統計的データのすべてを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータを伏せつつ、統計的データを持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめ、授業成果報告書を作成し、提出する。

②到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを子細に分析し、今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容・形式の妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な教育連携を可能とする。

③評価

本年度は 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有し、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また芸術学部 FD 委員会と拡大教授会において、授業アンケートのフォーマットや集計方法についての議論を繰り返し、芸術学部の実情にあわせた実施方法を模索することができた。

(3) 参観授業の実施と勸奨

①概要・活動内容（目的を含む）

芸術学部では以下の 5 科目について、全学教職員対象の公開授業（授業参観）を行った。「ソルフェージュⅡ」（辻裕久）、「クリティックセミナー B」（中村慎一）、「工芸史」（土屋俊典）、「美術科指導法Ⅱ」（高橋愛）、「西洋美術史 B」（小倉康之）。しかし、芸術学部の多様な授業形態を把握し、各教員の授業改善に役立てるためには、より柔軟な授業参観の形式が必要であると考えられる。そこで、各自の問題意識に即した形式の授業参観を勸奨したところ、教職担当の高橋愛助教より以下のような授業参観計画書が提出され、実施された。

②到達目標

教職科目「美術科指導法Ⅰ」「美術科指導法Ⅱ」（いずれも必修科目）における

指導内容の向上のため、教職科目「教科に関する科目」の必修科目の見学を行い、学生の実技力および実技の基礎知識を把握する。見学した授業の内容を踏まえ、「美術科指導法」の内容を再構築し、学生の理解をより向上させる。(高橋愛)

③活動内容

以下の授業を参観し、教職関連科目の再検討を進めた。

「絵画基礎」、「美術史基礎」、「平面造形基礎」、「工芸基礎」、
「立体・空間造形基礎」、「彫刻基礎」

④評価

芸術学部には美術科・音楽科教員志望の学生が多いが、教職関連科目と実技科目、理論系科目の連携を図り、学生の習熟度に合わせた段階的な学習プログラムを展開するのは難しい。しかし、教職担当の教員が関連する実技科目・理論科目の授業内容と学生のレベルを把握することで、緊密な教育連携と学生への的確な助言が可能となる。教員個人の問題意識に基づき、必要に応じて自発的な参観計画を立てることでより高い教育成果を期待することができる。そうした積極的な取り組みを促す意味で、今回の試みは極めて有意義であったと言える。

(4) 学外セミナー等への教員派遣

①概要（目的を含む）

第48回全国高等学校美術工芸研究大会2011高知大会への教員派遣。高等学校教諭との交流および研究会参加による教師力向上のための研修。

②到達目標

高等学校における芸術教育の現状、問題意識についての理解を深める。その上で、大学における芸術教育のあり方を見直し、高校から大学への発展的展開を考え、高大連携授業を有意義なものにしてゆく。

③活動内容

上述の研究大会において実施された講演会、パネルディスカッション、研究分科会に参加し、高等学校における美術科指導法についての知見を得た。

④評価

本学からは田中敬一・高橋愛の2名が参加した。それぞれ研究会や懇親会などに参加し、多くの高校教員と意見交換を行うことができた。今後、高大連携の教育プログラムを展開していく上で、極めて重要な知見が得られた。

(5) 工房教育視察研修の実施

①概要（目的を含む）

造形系単科大学の工房教育で成果を挙げてきた東北芸術工科大学と長岡造形大学への視察研修を企画し、玉川大学の造形・映像系教育の今後の取り組みを考える機会を設けた。

②到達目標

他大学における工房教育の現状と成果を把握し、本学における今後の造形教育を考える。最新の設備・機材、教育方法について網羅的な知識を得て、各自の授

業方法や学部・学科の運営方法を改善する。

③活動内容

実施時期：7月20日（水）～7月22日（金）

訪問先：東北芸術工科大学（山形市）、長岡造形大学（長岡市）

行程：20日（水）午前、東京発山形行（新幹線）

20日（水）午後、東北芸術工科大学訪問（山形市泊）

21日（木）午前、同大学工房視察

21日（木）午後、山形発（新幹線）、長岡行（長岡市泊）

22日（金）午前、長岡造形大学工房、スタジオ視察

22日（金）午後、自由解散

参加者：三井秀樹、島川聖一郎、中村慎一、田中敬一、林三雄、小倉康之、赤山仁、中島千絵、上浦佑太

受入担当：東北芸術工科大学映像学科 松村泰三准教授、長岡造形大学造形学部 境野広志教授

④評価

上記2大学の組織と運営方法、授業形態と設備・機材について、担当職員や各研究室の教員、学生から大変丁寧な説明を受けた。本学の学習環境や授業内容と比較しながら見学し、今後の学部・学科運営や授業改善のための様々なアイデアを出すことができた。インターネットなどで情報公開が進んでいるとはいえ、実際に他大学の工房教育の現場を訪れると情報量が違う。直接担当者の話を聴くことで大きな刺激を受け、それぞれ改革プランを練ることができた。

4 昨年度（平成22年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ・昨年度の計画通り、教師力向上を目的とした講演会を実施した。また、アート・スタンダードの学習プログラムも軌道に乗り、ネットワーク上での検定試験が既に運用されている。しかし、震災の影響もあり、外部講師も招いてのアート・スタンダード検定研修会は次年度送りとなった。
- ・一昨年度の拡大教授会での議論に基づき、新たな授業アンケートのフォーマットを作成し、全ての科目においてアンケートを実施することができた。ただし、春学期は震災の影響で中止となり、秋学期のみの実施となった。併せて授業成果報告書集の発行も行い、各自の授業点検と情報の共有に努めた。
- ・高大連携授業を意義深いものとし、大学における芸術教育の目的を明らかにするため、全国高等学校美術工芸研究大会などへの参加を促してきたが、本年度も教員を2名派遣し、詳細な報告書を作成した。
- ・大学FD委員会主催の研修会については、欠席者にも当日の資料やプレゼンテーションを配付し、拡大教授会において研修会参加者と大学FD委員がそれぞれの研修の意義と概要を報告した。大学としてのFD活動に関する様々な情報と問題意識を共有できた。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

- ・理論系科目と実技系科目を公平、客観的に評価するための方策を探り、全ての科目で同じフォーマットのアンケート調査を行うことができた。平成 24 年度以降は年 2 回の実施を予定している。アンケート結果の公表方法については引き続き議論を重ね、より良い方向性を見出していきたい。
- ・芸術学部ではそれぞれの授業における学習成果を相互に参観することを推奨してきた。パフォーマンス・アーツ学科は青山円形劇場、メディア・アーツ学科はデジタル・プラネット Music Japan TV および相模原・町田大学コンソーシアム、ビジュアル・アーツ学科は町田市立博物館などと産学連携を進め、学内教員のみならず学外者による授業参観を実施してきた。今後もそうした授業成果報告、公開発表会を積極的に行い、カリキュラム改革・授業改善のための環境作りを進めていきたい。
- ・年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的とした研修会・親睦会を実施した。全体会では学部の教育目標と今後の FD 活動についての講演を行い、その後、学科ごとに改善すべき点について議論した。芸術学部には所属する専任教員と非常勤教員が一同に会することで、より緊密な教員連携を図るための雰囲気作りをすることができ、次年度に向けて様々な情報を共有することができた。平成 24 年度も同様の研修会・親睦会を計画中である。また、こうした交流の機会をさらに広げる方向で議論を進めている。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また全学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で年 1 回実施される専任教員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 23 年度の活動内容

(1) リベラルアーツ学部 自衛消防訓練

①概要（目的を含む）

災害発生時等における教員の役割を確認し、消防計画に係る自主点検の要点を学ぶとともに、教員がすべき災害時初動対応の要領を体験的に理解する。

②到達目標

参加教員全員が以下の 3 点を十分に理解し、実践できるようになること。

i) 災害発生時の初動対応要領について

ii) 消防設備等の取扱訓練と確認事項について（屋内消火栓稼働による放水訓練等を含む）

iii) 消防計画に定める自主点検表の着眼点について

③活動内容

訓練には 18 名の専任教員が参加し、キャンパスセキュリティセンター（原嶋敏夫氏）による指導の下、以下の内容が実施された。

i) 災害発生時の初動対応訓練

A) 発見の契機から通報、初期消火、避難誘導へと至る手順の確認と実際の行動

B) 避難路の確認および非常口周辺の日常的対応方法の実践

ii) 消火設備等の取扱訓練（屋内消火栓設備を実動させての消火訓練）

④評価

定量的な評価は実施していないが、訓練後の拡大教授会で参加教員からの意見を聴取したところ、東日本大震災を経て防災意識が高まっていたこととも相まって、災害発生時にすべき初動対応や避難経路についてとても具体的に理解するこ

とができたという意見が多く聴かれた。したがって到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(2) リベラルアーツ学部 救命救急講習会 (普通救命講習 [自動体外式除細動器業務従事者])

①概要 (目的を含む)

教育・研究活動時における教員の救命救急役割を確認し、同活動時の適切な救命救急処置を、AED の使用方法も含めて実践的に学ぶ。

②到達目標

参加教員全員が救命救急に必要な知識を習得し、救命救急処置の実技講習 (AED の使用も含む) を通じて確実に処置法を身につけること。

③活動内容

講習会には 16 名の専任教員と 1 名の事務職員 (学部長室長) が参加し、東京消防庁の講師による「普通救命講習 (自動体外式除細動器業務従事者)」(4 時間) を受講した。心肺蘇生、AED、異物除去、止血法などについて基本的なレクチャーを受けた後、特に AED の使用も含めた心肺蘇生の方法に関して実技訓練を行い、最後に知識確認のテストを実施した。

④評価

講習会終了時の知識確認テストでは、ほぼ全員の参加者が満点に近い成績を達成し、後日、全員へ救命技能認定証が送付された。また、AED の実技訓練では皆が機器をスムーズに使用できていたようである。したがって到達目標は十分に達成されたと評価できる。

(3) 2011 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

①概要 (目的を含む)

以下の 3 点に関する講演聴講および参加者全員によるディスカッションを実施する。

- i) リベラルアーツ系・他大学の教育実践の研究
- ii) i) を参考とした、リベラルアーツ教育の強みを活かしたキャリア教育の検討
- iii) TAMAGAWA VISION 2020 に向けた本学部の具体的実践の検討
- iii) 2012 年度新入生研修の現場確認および打ち合わせ

②到達目標

学部独自のリベラルアーツ教育およびキャリア教育の方針に関して、教員間で共通認識をもち、それを学部としての体系的な教育実践へ活かすこと。

③活動内容

2012 年 2 月 16 日・17 日の両日に渡り、湯本富士屋ホテルにて、以下の内容を実施した。なお、参加教員数は 20 名であった。

- i) リベラルアーツ系・他大学の教育実践に関する調査報告 (質疑応答を含む)
A) 立命館アジア太平洋大学 [石川晶生・八木橋伸浩]

B)国際基督教大学 [佐藤久美子]

C)国際教養大学 [照屋さゆり]

ii) 講演：「国際基督教大学のキャリア支援について」

[国際基督教大学 学務副学長 日比谷潤子 教授]

iii) パネルディスカッション 司会 [佐藤久美子]

パネラー [日比谷潤子 先生/河津真子氏 (本学教育企画課) /石川晶生/
八木橋伸浩/照屋さゆり]

iv) TAMAGAWA VISION 2020 に向けた本学部の具体的実践の検討

v) 2012 年度新入生研修の現場確認および打ち合わせ

④評価

定量的な評価は実施していないが、研修会後に参加教員から意見を聴取したところ、以下の点については参加教員間で共通認識を持てたことが確認できた。

i) リベラルアーツ系の他大学における教育実践はいろいろな面で参考にはなるものの、それらに追従するのではなく、それら他大学との差異をいかにしてアピールしていくのが本学部にとって重要である。

ii) 新卒就職の実績のみを追求するのではなく、リベラルアーツ教育の成果が活かされる多様なキャリア形成 (たとえば大学院進学など) を支援するべきである。

iii) 受験生獲得から教育の質向上に至るまで、TAMAGAWA VISION 2020 に向けた体制改善を目指すためにも、入学生に対するきめ細やかな意向調査を実施し、その結果をフィードバックしていくべきである。

したがって、共通認識の保持という点においては、到達目標は概ね達成できたと評価できる。

(4) 学生による授業評価アンケート [2011 年度] (Bb を利用)

①概要 (目的を含む)

学部教員がよりよい授業を展開するために、学部コア科目・学部導入科目・発展科目を中心とした科目群に関する学生の意識・行動をアンケート形式 (自由記述を含む) で把握する。

②到達目標

アンケート結果を鵜呑みにするのではなく、客観的に有用と思われる結果を教員が参考とし、それを今後の授業改善へ具体的に活かすこと。

③活動内容

2011 年度秋学期終了後、学部コア科目・導入科目・発展科目の主要な履修生であり、かつ新カリキュラムの適用対象である 1 年生を対象とし、40 問程度の設定に対して 5 件法および自由記述にて回答してもらった。実査は Bb を通じて実施され、有効回答率は約 48% (2012 年 3 月 31 日現在) であった。

④評価

結果を概略的に、かつ抜粋して評価すると、メジャー選択のための重要基礎科目である「リベラルアーツ入門」については、「授業には意欲的にとりくんだ」と

いう命題に対して「あてはまる」が 27.1%、「どちらかといえばあてはまる」が 56.5%という結果となっており、この科目に対する学生のモチベーションの高さが読み取れる。また「オムニバス形式の授業は満足した」という命題に対しては「あてはまる」が 30.4%、「どちらかといえばあてはまる」が 41.3%となっており、昨年度の結果（前者：25.8%／後者：43.1%）よりも良好な結果が得られたといえる。

また、「学部の授業全体について」というセクションの「今後のメジャー選択・将来の進路に役立つ科目があった」という命題に対しては、「あてはまる」が 28.2%、「どちらかといえばあてはまる」が 40.2%であった。この数値も昨年度の結果（前者：27.5%／後者：32.7%）に比べて高くなっており、「広さと深さ」をバランスよく追求するという本学部のポリシーに沿った科目運営の改善がなされつつあると評価できよう。

4 昨年度（平成 23 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。
- ②FD 活動の学部内における位置づけをより明確にし、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していく。
- ③リベラルアーツ教育における分野間連携の具体的なプランを、教員相互の提案・議論を通じて検討し、本学部オリジナルの授業運営方針を構築していく。
- ④新カリキュラムの運営において、各々の教員が担当授業における学生の学習状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を確実に把握・改善するよう努力し、本学部における学士課程教育の質を保証できるようにする。

①については昨年度と同様に、FD 研修会や救命救急講習会の実施や拡大教授会におけるディスカッション、および日常的な教員相互のブリーフィングなどによって概ね実践されてきたと評価できる。②に関しては、新カリキュラムのスタートを契機として FD 活動のあり方に関する議論をすることができたものの、やはり本年度も仕組みの構築にまでは至らなかったため、引き続きの課題とする。③については新カリキュラムにおける「ブリッジ講座」の内容検討と具体的な授業プラン（シラバス構成）の構築という形で達成されつつあるが、引き続き分野間連携のあり方を模索する必要がある。④に関しては、担任教員が中心となり、新カリキュラム適用対象の 1 年生に対して学習状況をはじめとした各種実態を把握するよう努めてきた。しかし、収集された知見の分析とそのフィードバックはいまだ進められていないため、この点についても継続課題としたい。

5 今後（平成 24 年度以降）の予定・課題について

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。加えて、「研究力」の向上を目指した取り組みもスタートさせる。
- ②新カリキュラムおよび TAMAGAWA VISION 2020 を念頭に置いた FD 活動の学部内における位置づけをよりいっそう明確にし、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していく。
- ③「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。
- ④新カリキュラムの運営において、引き続き学生の学習状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう努力する。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

平成14年から継続してきた研修会は、今年で10年目を迎えた。この10年間全体の研修会の開催回数は35回、参加述べ人数は251名（うち在職者は194名）となり、ひとつの区切り目の年となった。平成14年～17年までは年間5回、平成18年～21年までは3回実施してきたが、平成22年度からは、対象者を新任教員中心にし、開催回数を2回に減らした。今年も2回開催の予定であったが、他の学校行事と重複したため参加不可能な人が多くなり、実際は1回しか開催できなかった。しかも、この1回も入試日と重複したため、参加者が3名という寂しいクラスであったが、それだけに中身の濃い充実した運営ができた。2日目には関東では珍しい大雪で電車の便も悪くなったが、3名という少人数の利点で、早めに切り上げて16時前に終了できた。

(2) 研修プログラム内容

2日間、朝9時から17時までの日程であるが、演習が中心の内容である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

また視聴覚教材の演習では、PowerPointに頼らない教材作成方法として、マグネット教材や3色カードの紹介をした。

第1日目	第2日目
第1章：プレゼンテーションの基本 第2章：視聴覚教材の使い方	第3章：質疑応答の技法 演習3：基本的な技法の演習 演習4：ディスカッション
演習1：模擬授業 プレゼンテーション(1) 演習2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習5：模擬授業 プレゼンテーション(2) 第4章：まとめ 演習6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は以下のとおりである。

- ・第1回： 9月13日（火）～9月14日（水） 参加者の調整がつかず中止
- ・第2回： 2月28日（火）～2月29日（水） 3名 研究管理棟 507 教室

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。10年間の履歴が分かるように年度別に表記してある。23年度は2行目で、年度を網掛けにした。3名の平均を出すことはあまり意味がないと思われるので、最上行に10年間の累計を記載した。この行はすべて網掛けにしている。

「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1とした平均である。合計人数には無回答を含めていないので、項目によって人数が異なる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点
累計	202	43	5	1	0	251	47.9	累計	197	45	6	0	0	237	47.2	累計	73	145	25	5	0	247	41.8
23年	2	1	0	0	0	3	4.7	23年	1	2	0	0	0	3	4.3	23年	1	2	0	0	0	3	4.3
22年	8	1	0	0	0	9	4.9	22年	8	1	0	0	0	9	4.9	22年	5	3	1	0	0	9	4.4
21年	11	5	0	0	0	16	4.7	21年	12	4	0	0	0	16	4.8	21年	7	8	1	0	0	16	4.4
20年	16	4	0	0	0	20	4.8	20年	14	3	1	0	0	19	4.5	20年	3	13	3	0	0	19	3.8
19年	20	3	0	0	0	23	4.9	19年	20	2	1	0	0	23	4.8	19年	10	11	2	0	0	23	4.3
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8	18年	3	11	2	0	0	16	4.1
17年	28	5	1	0	0	34	4.8	17年	27	7	0	0	0	34	4.8	17年	12	16	5	0	0	33	4.2
16年	29	3	1	0	0	33	4.8	16年	28	4	1	0	0	33	4.8	16年	10	21	3	0	0	33	4.2
15年	34	3	1	0	0	38	4.9	15年	32	4	1	0	0	37	4.8	15年	12	22	2	1	0	37	4.2
14年	41	15	2	1	0	59	4.6	14年	43	14	2	0	0	59	4.7	14年	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点
累計	170	70	6	3	0	249	46.4	累計	236	16	1	0	0	250	49.6	累計	204	45	4	0	0	249	47.7
23年	2	0	1	0	0	3	4.3	23年	3	0	0	0	0	3	5.0	23年	2	1	0	0	0	3	4.7
22年	7	2	0	0	0	9	4.8	22年	9	0	0	0	0	9	5.0	22年	9	0	0	0	0	9	5.0
21年	12	4	0	0	0	16	4.8	21年	16	0	0	0	0	16	5.0	21年	12	4	0	0	0	16	4.8
20年	12	7	1	0	0	20	4.6	20年	21	2	0	0	0	20	5.0	20年	19	4	0	0	0	19	4.6
19年	14	9	0	0	0	23	4.6	19年	21	2	0	0	0	23	4.9	19年	19	4	0	0	0	23	4.8
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	15	1	0	0	0	16	4.9	18年	14	2	0	0	0	16	4.9
17年	21	12	0	0	0	33	4.6	17年	33	1	0	0	0	34	5.0	17年	29	4	1	0	0	34	4.8
16年	27	6	0	0	0	33	4.8	16年	32	1	0	0	0	33	5.0	16年	29	4	0	0	0	33	4.7
15年	26	10	1	1	0	38	4.6	15年	35	3	0	0	0	38	4.9	15年	31	5	1	0	0	37	4.8
14年	36	17	3	2	0	58	4.5	14年	51	6	1	0	0	58	4.9	14年	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点
累計	144	79	22	5	4	245	4.5	累計	190	57	5	1	1	250	47.1
23年	3	0	0	0	0	3	5.0	23年	3	0	0	0	0	3	5.0
22年	4	4	1	0	0	9	4.3	22年	6	3	0	0	0	9	4.7
21年	6	9	1	0	0	16	4.3	21年	13	3	0	0	0	16	4.8
20年	13	4	1	0	0	18	4.4	20年	17	6	0	0	0	19	4.4
19年	9	13	0	0	0	22	4.4	19年	17	6	0	0	0	23	4.7
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	11	5	0	0	0	16	4.7
17年	20	10	10	0	1	32	4.5	17年	26	6	1	0	1	34	4.6
16年	24	8	1	0	0	33	4.7	16年	26	6	1	0	0	33	4.8
15年	24	9	5	0	0	38	4.5	15年	31	6	1	0	0	38	4.8
14年	28	19	3	5	3	58	4.1	14年	40	16	2	1	0	59	4.6

④ 研修会の開催について

開催場所							事務処理・連絡								
年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点
累計	158	65	13	7	0	249	46.4	累計	143	68	27	10	4	248	45.2
23年	3	0	0	0	0	3	5.0	23年	3	0	0	0	0	3	5.0
22年	8	1	0	0	0	9	4.9	22年	8	0	1	0	0	9	4.8
21年	14	2	0	0	0	16	4.9	21年	15	1	0	0	0	16	4.9
20年	14	4	2	0	0	20	4.6	20年	19	3	2	0	0	20	4.7
19年	17	5	1	0	0	23	4.7	19年	19	3	2	0	0	24	4.7
18年	10	5	1	0	0	16	4.6	18年	8	7	1	0	0	16	4.4
17年	29	5	0	0	0	34	4.9	17年	19	9	3	1	1	33	4.3
16年	24	7	1	0	0	32	4.7	16年	22	9	2	0	0	33	4.6
15年	22	12	2	1	0	37	4.5	15年	16	16	1	2	1	36	4.2
14年	17	24	6	6	0	59	3.6	14年	14	20	15	7	2	58	3.6

研修を継続すべきか							他の人に参加を勧めるか								
年	A	B	C	D	E	計	点	年	A	B	C	D	E	計	点
累計	199	34	9	3	1	247	47.2	累計	188	48	13	2	0	245	46.8
23年	2	1	0	0	0	3	4.7	23年	1	2	0	0	0	3	4.3
22年	9	0	0	0	0	9	5.0	22年	7	1	7	0	0	9	4.7
21年	13	2	0	0	0	15	4.6	21年	11	4	0	0	0	15	4.7
20年	14	4	1	0	0	20	4.5	20年	12	7	0	0	0	19	4.4
19年	18	2	2	0	0	22	4.7	19年	18	3	1	0	0	22	4.8
18年	14	1	1	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8
17年	23	6	2	0	1	32	4.6	17年	23	7	2	0	0	32	4.7
16年	27	5	1	0	0	33	4.8	16年	29	4	0	0	0	33	4.9
15年	33	4	0	1	0	38	4.8	15年	34	2	1	0	0	37	4.9
14年	46	9	2	2	0	59	4.7	14年	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになるということは事実である。しかし23年度は1クラスのみで開催で、参加者が3名であるので、記述的に書かれたコメントを集計したり、カテゴリーに分けたりする意味はないかと思われる。ここでは、注目すべきコメントに私見を含めて記述する。

■「有用性」について、「研修を受けて“なるほど”と思う点があった」というコメントや「継続することに賛成」という意見があった。これらは、研修会の開催の必要性については認識されているということの意味すると解釈できる。

しかし、研修会で学んだことや気付いたことを「維持・向上し続けることが重要なポイントである」というコメントがあり、これは当該研修会で終わるのではなく、FDの一環として「維持・向上プログラム」が別に求められていると感じた。

■「内容」に関しては、現行カリキュラムに対する改善要望はなかったが、ディスカッションの時間をもっと長くにとって、教員相互の教え方の工夫を共有するような研修が望ましいというような意見があった。教員同士の交流を図る機会を望む意見は、毎年出てきており、「ディスカッション」の有用性を感じることができる。当該研修会の内容として含めるだけでなく、他にも同様の機会を増やす努力が必要であることを感じた。

■「その他」の意見として“「プレゼンテーション」という言葉を教育活動に関連づけるのは難しい」というコメントがあった。研修会の中で「講義」と「プレゼンテーション」の関連について説明したつもりであるが、違和感を持たれたようである。いくつかのプレゼンテーション・ツールを紹介したが、それらが大学の授業ではふさわしくないと感じられたのかもしれない。授業内容や学生の質など、種々の要素でやり方が変わると思うが、多くの方法のひとつとして考えていただければと思って紹介したつもりであったが、その点についてもう少し深く議論する必要があったのかもしれないと反省した。

(5) ディスカッションの実施

2日目午前中のディスカッションは、FD活動の基盤となるコミュニケーションを円滑にする重要な役割を担っている。参加者に好評で、全員で熱く語り合うことができる時間である。アンケートからも、もっと大規模に教員同士で、時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけていくような活動の必要性を感じる。しかし、それは当該研修会ではなく、次のステップとして考えることが必要だと感じる。

参加者が3名であったこと、そのうち2名は同じ学科で研究室も近いということで、普段から教育についての話し合いが行われているためか、1つの意見に対する反対意見やそれを拡張するような意見が出されず、発展的な話し合いには至らなかった。しかし、やはり色々な意見が得られ、それなりの効果があったと思う。

なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、内容別に分類するだけにとどめる。なお、参加者全員に、掲載についての事前承諾をいただいている。

第2回 (2/28~29) (名簿順、敬称略)

宇井 美代子、平林 壮郎、ゴットアルド マルコ (計3名)

最初に FD 活動への疑問が投げかけられ、学生の質や大学の目的という大きな問題に話題が及んだ。もう少し時間がとれると、より深い話になったかもしれないが、雪が降りだし、交通マヒが予想されたので早めに切り上げた。ここで途中になった話題は、今後どこかで続いていくと信じて掲載する。

★FD 活動について

- 「分かりやすい授業」に改善することは必要か？
 - 授業を分かりやすくすればするほど、学生の質が落ちるのではないか。
 - プレゼンテーションのツール (マグネットや3色カード) を使って説明することは、学生を子供扱いしているのと同じではないか。
 - 最初から、学生と大人同士の関係を築くべきである。(大人と子供ではなく)
 - 「分かりやすい」授業に慣れてしまうため、上司の話を理解できないような学生をつくってしまうのではないか。
- FD の最終目的は、教員の授業を改善することか？
 - 最終目的は教員側ではなく、学生を人間的に成長させることである。
 - FD の目的は“一人前の大人”として卒業させることである。

★学生の質について

- 学生の質が落ちている
 - 進学率が上がれば、質が下がるのは仕方ないことである。
 - 学部によって、質に差があるようである。
 - 目的が明確になれば学ぶ意欲が生まれて、質が上がるはずである。
- 学生に目的意識がない
 - 検定や試験に受かることが目的だと思っている。
 - とりあえず大学に入ったような学生が多く、目的がないのは当然である。
 - 大学は日本社会の縮図であるから、社会全体に目的・目標がないことを反映しているだけである。
 - 学ぶ意味が分からない学生が多すぎる。
- 目的意識のない学生に対する教員のあり方を考える必要がある
 - 学生の心に種を撒くことができればよいのではないか。
 - 教員が教えることはすぐに役立つのではなく、社会に出て何年もたってから理解できることも多々あってよい。
- 学生をお客様扱いすることがよくない
 - 学校もサービス業であるから、お客様であることは事実であるが、「お客様扱い」はよくない。

- 「お客様扱い」と「甘やかすこと」とは異なる。
- 今はサービスを受ける側の学生も、次にはサービスを提供する側になることを自覚させるべきである。

★アンケートについて

- 眠っている学生のアンケートも数字に反映されるのはおかしい
 - その結果に左右されたくはない。
 - 熱心な学生の意見は聞きたいが、いいかげんな学生の意見は無用である。
- アンケートの質問項目が具体的ではない
 - 今年から項目が変更され、前に比べて改善されている。
 - 今後も必要に応じて改善するべきである。
 - すぐには分からないが、社会に出たときに気付くような事柄は、アンケートには反映されない。
- アンケートのデータは事実を反映しているのか？
 - 最後の数分で実施するので、記入する側もいい加減になってしまう。
 - 期末の同じ時期に、どの授業でも記入させられるので、学生も疲れる。
 - Blackboard で、数日の期間内に記入させるようにすれば、もっと重要なメッセージを収集できるのではないか。
 - Blackboard で実施する場合、アンケート記入がないと成績をつけられないようなシステムにすれば、必ず全員が参加する。

★授業について

- 授業のレベル
 - 多人数の授業では、全員にレベルを合わせようとする、授業はできない
 - 少数の熱心な学生にレベルを合わせると、他の多くの学生のレベルには合わない。
 - 大多数の学生にレベルを合わせると、レベルが下がる。
- 学生によって合う、合わないがあるので、いろいろな教員がいてよいし、授業のやり方も色々あってよい

★評価について

- そのまま点数をつけるとFが多くなるので、結局底上げすることになる
- 1年生のときの評価が甘いと、それでよいと思ってしまう
- 簡単にAがとれると思ってしまうと困る

(6) 実施の成果

プレゼンテーション研修会を実施して10年となり、一区切りの年となった。10年を経て当該研修会はすっかり玉川大学において定着してきた。10年間のフリーコメントやディスカッションを振り返ると、10年前にはFDへの関心が薄く、できれば避けて通りたいという意識だったが、今では積極的にFDに参加して自己の授業を改善しようという機運が高くなってきたことを感じる。少なからず、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まったことが、FD活動への参画意欲の向上に寄与してきたのではないかと思っている。この間、改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきたし、実際に多くの改善がなされてきた。こうした具体的な提案は、大きな進歩と考えることができる。

(7) 今後の課題

当該研修会は着実に成果を上げていると考えることができるが、FD活動全体を考えると、非常に小さい一歩を踏み出したに過ぎない。参加された先生方から、ディスカッションや休み時間の会話を通じて、多くの積極的な提案がなされている。これらの意見から今後の課題として取り上げらるべき事柄を洗い出して、ここに記載しておく。

a. 改善に結びつけるためには、次の段階の研修会が必要である

当該研修会の目的は、「プレゼンテーション技術の向上」ではない。それによって「授業改善」が行われ、さらに「教育の質向上に役立つ」ことが本来の目的である。そのためには当該研修会の実施だけではなく、次の段階の研修会を検討することが必要である。

まずは各学部、学科ごとに、講義内容だけでなく設備や環境を考慮した研修会が必要になる。学部によっては公開授業などを頻繁に実施しているようであるが、玉川大学全体として、こうした学部、学科に特化した研修会の実施が期待される。

b. 大学全体としての講義力を向上させるには、受講対象者を拡大する

当該研修会は、専任教員のみが対象である。しかし、学生にとっては常勤も非常勤も区別なく「先生」であることに変わりはない。今後は非常勤講師、特に講義形式が多い学科を担当する人に対しても、研修会を広げていく必要が出てくるのではないかと考える。

c. 研修会を継続するには担当者を拡大する必要がある

今後の展開を考えると、当該研修会の担当者を養成する必要がある。こうした研修会は属人的なものであってはいけない。特定の担当者しかできない研修会ではなく、誰もが担当できるプログラムにするべきである。誰が担当しようとも、また何年たとうとも必要なプログラムとして継続していくことに価値がある。実際、FD活動が盛んな大学でも、これだけ継続して1つのプログラムを実践している大学は少ない。

単発的なイベントに終わるFDではなく、地に足のついた本当に役立つFDの実績を残すためにも、10年、20年とこの研修会を継続する方策を検討することが大切だと感じている。そのためにも、人材確保の必要性を感じる。

(8) 終わりに

10年前に比べると、学部や学科単位で公開授業が行われたり、FDに関するワークショップも数多く開催されたりと、FD活動に参加する機会が多くなってきた。アクティブ・ラーニングやグループ討議も授業に取り入れられてきた。そう考えるとプレゼンテーションに特化した研修会の需要は以前に比べて少なくなっているのかもしれない。

しかし、授業の方法がいかに進化したとしても、授業の基本は「分かりやすい話し方」であることは永遠に変わらない。授業の方法が多様になればなるほど、プレゼンテーション技法の必要性は増すはずである。

どれだけ準備しても、熱意をこめても、学生の視点で自分の授業を評価できなければ、改善はできない。残念ながら、自分の姿を自分で見ることは不可能である。それを一部だが可能にするのは、ビデオである。学生が、自分の授業をどのように受け止めているかを、実感として体感するためにも、ビデオを使った当該研修は有意義だと信じている。

また対外的にも知られるようになり、他大学からの問い合わせも来ている。どこの大学でもFD研修会の実施は多くなってきたが、個別にビデオまで使用してプレゼンテーションを実践しているところは少なく、今後も注目される活動の1つとなると思われる。

他大学でこうした研修会を実践できない理由は、同僚の教員の前に立ち、時には恥ずかしい思いをしながら模擬授業を行うという、研修内容に依るところが大きい。玉川大学で、その大きな山を越えて当該研修会を10年間継続してきたことは大いに意義があるといえる。この実績を生かして、さらに発展的に当該研修会を継続していくことが、玉川大学におけるFDを、より実践的で確実な活動にする動力の1つとなるに違いないと思う。ただし、そのためには、前項の「課題」をクリアする必要がある、それにはさらなる努力と時間と情熱が不可欠となるであろう。

2. 新任教員研修会

平成 24 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成 14 年度より開始されたもので、10 回目の開催となる。参加者 12 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 24 年 3 月 1 日（木）10:00～17:00 *18:00 より、懇親会開催
2 日（金）10:00～16:00

場 所：大学 9 号館 400 教室

対 象：平成 24 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。
・専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明
することができるようになる。

・専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

（1）研修プログラム内容

1 日目：3 月 1 日（木） 会場：大学 9 号館 400 教室

時 間	内 容	資 料	担 当
10:00	開 始／研修説明		学士課程教育センター
10:05	開催にあたって		小原芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介		学士課程教育センター
10:40	講演「玉川大学の教育理念」	No.1	島川聖一郎 理事・芸術学部教授
12:00	昼食会		
13:00	教学事項に関する質疑応答 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）	No.2	教学部 教務課 授業運営課 学務課
14:10	生活上の学生指導について	No.3	向山光則 学生センター長
14:25	キャンパス・ツアー		学士課程教育センター 人事部
15:55	玉川学園の個人情報保護方針について	No.4	教育企画部 教育環境コンプライアンス課

16:25	質疑応答／翌日の予定説明		人事部
16:40	キャンパス・カード用写真撮影・映像撮影		総務部DTP制作課
17:00	終了（一時解散）		
18:00	懇親会（学外で開催）		大学FD委員会

2日目：3月2日（金） 会場：大学9号館400教室

時間	内容	No.	担当
10:00	研修説明		人事部
10:05	アカデミック・ポートフォリオについて 研究者情報システムについて	No.5	学士課程教育センター 教学部教務課
10:35	本学のICTを活用した教育 玉川大学共通アカウントについて NotesシステムとNotes掲示板の活用	No.6	eエデュケーションセンター 総務部情報システム課
12:00	昼食		
13:00	講演「これからの大学と教員の役割」	No.7	菊池重雄 教学部長
15:45	質疑応答／まとめ		人事部
16:00	終了		

（2）配付資料・参考資料

資料No.	資料タイトル	担当部処
なし	平成24年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部 研修 センター
	平成24年度新任教員研修会 出席者一覧	
	平成24年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
	創立者の息づかいが伝わる「小原記念館」（全人No.739 2010.5月号抜粋）	
なし	大学教員の勤務について	人事部 人事課
	給与について	
	新しく加入者になられる皆さんへ（共済事業）	
	WELBOX 会員の皆様へ	
No.1	「玉川大学の教育」	島川理事 (学士課程 教育 センター)
	参考資料「玉川学園12年生限定連携プログラム2011」	
	参考資料「玉川大学の学部変遷図」（玉川学園創立80周年記念誌抜粋）	

資料No.	資料タイトル	担当部処
No.2	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要担当業務等について	教学部 教務課
	業務分掌細則 平成 23 年 4 月 1 日	
	学校法人玉川学園 組織機構図 (平成 24 年 4 月 1 日施行)	
	在籍学生数一覧 (20110501)	
	教職員在籍者数 平成 23 年 5 月 1 日	
	学部運営組織	
	ご着任にあたって	教学部 学務課
	平成 24 年度新任教員研修会 教学事項【授業運営課】	教学部 授業運営課
No.3	学生対応についてのお願い	学生 センター
No.4	「学校法人玉川学園における個人情報保護の取り組みについて」 (PPT)	教育企画部 教育環境 コンプライアンス課
	情報機器 (モバイルシステム) セキュリティ対策ガイド	
	個人情報保護のわかりやすいしくみ	
	写 「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取り扱いを確保するために事業者が構うべき措置に関する指針」 解説 (冊子)	
	学校法人玉川学園コンプライアンステキストブック ※割愛	
No.5	研究者情報システム R e a P 教員用マニュアル (説明会用抜粋)	教学部
	研究者情報システム R e a P 管理者・教員共通マニュアル (説明会用抜粋)	教務課
No.6	I C T を活用した教育 (PPT)	e エデュケー ション センター
	e-Education NewsLetter 2011 特別号	
	e-Education NewsLetter 2011 Vol.1	
	キャンパスネットワークについて (PPT)	
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	e-Education ガイド 平成 23 年度入学生用	
No.7	これからの大学と教員の役割	教学部長 (学士課程 教育 センター)
	教育課程等の概要	
	平成 24 年度「一年次セミナー102」シラバス (基本版)	
	FDマップ「大学教員のキャリアパス」	

資料No.	資料タイトル	担当部処
事前 送付	小原國芳『全人教育論』	(玉川大学 出版部)
	玉川学園編『愛吟集』	(玉川大学 出版部)
	「全人 2012 年 2 月号」	(玉川大学 出版部)
	Tamagawa 教職員ハンドブック	(CIC)
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット	(CIC)
	図書館利用ガイド (教員用)	図書館 運用課

(3) 実施の成果

本学における教育について高等教育のコンテキストから参加者に理解してもらえるような講演の時間を設けた。また、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項などとあわせ、「これからの大学と教員の役割」と題した講演の時間を設け、大学における教育・研究活動にすぐに役立つ内容を盛り込んだ。研修会の運営にあたっては、受講者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えることを心がけた。

研修内容・資料・講師の説明については、参加者の多くが、「とても充実していた」、あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである：

- ①玉川大学全体の様子を理解できたこと。職場や働き方のイメージがつかめた。
- ②玉川大学教員となるために必要な（最低限の）ことが自分なりに得られた。
- ③大学と文科省、他大学との関係、位置づけが分かった。大学全体のチームワークが実感できた。学長先生、職員、同期に会えてよかった。心がまえができた。
- ④基本的な点を押さえた内容で良かった。
- ⑤玉川大学としての大学生への意欲、方針が理解できた。
- ⑥同期の新任教員と触れ合えたこと。玉川大学の FD 委員をはじめ、みなさんと（懇親会も含め）いろいろな形でお話できたこと。菊池先生のお話がとても興味深かった。
- ⑦全く分野の違う先生方と交流ができ、また、今後の参考になる知見が多く得られた。
- ⑧グローバルな視点で、大学の置かれている状況は具体的に良く理解できた。
- ⑨玉川大学の全体像がよく理解でき、大変有意義だった。
- ⑩時間内にコンパクトにまとめて説明してもらいよくわかった。

その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった：

- ①入職後も、ぜひこのような研修会に参加させていただきたい。

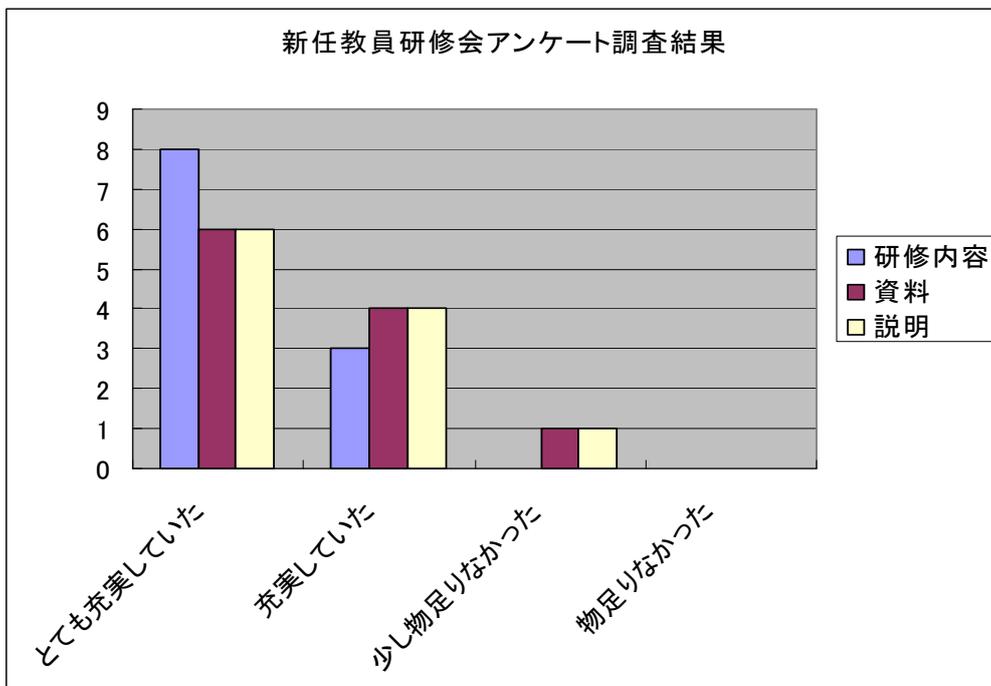
- ②2日だけでなく、忙しいとは思いますが長くやっていただきたいと思った。
- ③IT関連の説明のボリュームが少し多かった。

また、要望・感想として、次のようなコメントがあった：

- ①玉川ブランドについて、もっと知りたい。学部間交流のよい機会だった。
- ②学務の細かい内容を知りたかったが、別の機会に伺う。
- ③初めての人間にとっても親切に対応していただいた。昼食や音楽など、もてなしの心、玉川の心に感動した。
- ④1日目の夜の懇親会を開催してくださり、ありがとうございました。みなさんといろいろお話しできてだいぶうちとけることができた。
- ⑤各先生方のご準備に感謝します。
- ⑥この研修会を通して、玉川学園の一員となることを改めて実感した。また、その名に恥じないよう、精進して参りたい。
- ⑦午後の研修の中で、学内見学を入れてもらってよかった。
- ⑧1日目の夜の会は、とてもお互いの交流ができたと思う。ありがとうございます。ランチもおいしかった。

これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は達成できていると評価できる。あわせて、本研修会が新任の先生方との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考える。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。



* 上記項目に関する無回答1名

以上

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01

文学部比較文化学科准教授：松本 博文先生

文学部の学生と教員を縦にも横にもつなぐ上での活用

文学部では平成20年度より「文学部コミュニティ」という活動を展開しています。昨今大学生に対して「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」といった「社会人基礎力」が求められていますが、これを授業の中だけで身につけるのは容易ではありません。そこで、言わば「文学部の課外活動」として、そうした力を養成する場をさらに提供するのが文学部コミュニティです。

今回は、教員の中でも特に中心にかかわる教員アドバイザーの一人として活動している筆者が、文学部コミュニティにおける大規模でのBlackboard@Tamagawa（以下Bb）の運用についてご紹介します。



グループの規模と活動概要

- ◆グループ名：文学部コミュニティ
- ◆参加者：文学部・文学研究科の全学生・全専任教員・チューター（約1,000名）
- ◆活動概要：談話会、特別講演会、エッセイ・コンテスト、スポーツ大会、雑誌制作、SIG等多岐に渡る活動を、学生と教員が協力しながら企画・運営しています。その活動を支援すべく、情報の共有とメンバー間の連絡を主な目的にBbを活用しています。

Bbの基本構成と主な活用法

Bbには、参加者として学生・教員を問わず文学部・文学研究科の全員が登録されています。管理者は、代表の文学部長にアシスタントの担当教員3名を加えた計4名です。コースメニューでは自由に変更できる機能を使い、「アナウンス」「掲示ポスター」「イベント情報」「SIG関連情報」「一般向け情報」「スタッフ向け情報」「連絡用フォーラム」を設定しています。主な

活用法としては、以下の3点が挙げられます。

①イベント情報の伝達

談話会等の様々なイベントにおいて、最も難しいものの一つが広報です。通常の掲示板も利用しますが、他の掲示物に紛れ、必ずしも十分に情報が伝わらないという問題があります。Bbのアナウンス機能では、ログイン後の「My Page」画面の右上に最新の情報が提示されるので、より参加者の目にとまりやすく、情報を伝えやすくなります。また、「掲示ポスター」「イベント情報」でも掲示と同じポスターや情報を載せることで、時間・場所を選ばずにより広く情報を提供できます。

②学生スタッフへの連絡

学生メンバーの中でも、学生スタッフは中核として企画・運営にかかわります。その学生スタッフと教員アドバイザーは不定期にミーティングを行いますが、時間割の関係上、全メンバーが集まるのは難しいのが現状です。そこで、「ス

「スタッフ向け情報」でミーティングの結果等を掲示することで、参加できなかったスタッフにも情報を伝達することができます。また、必要に応じてeメール機能を使って個別に連絡をとることもできます。

③ SIG の支援

SIG は Special Interest Group の略で、共通の興味・目的を持った有志の学生が集まって自主的な学習・研究グループを作り、継続的に勉強会を開くことのできる制度です。その活動支援の一環として、Bb ではアナウンス機能を通して連絡を掲示したり、「SIG 関連情報」において設立関連情報を提供したりしています。中でも最も有用なのがディスカッションボード機能を使った「連絡用フォーラム」です。各 SIG の運営形態にもよりますが、SIG はこの機能を活用してメンバー間の連絡や資料の配付を行っています。



図1. 文学部コミュニティ SIG

アナウンス機能やコンテンツ領域である「SIG 関連情報」は便利な機能である一方、いずれも管理者でなければ情報を加えたり削除したりできません。そのため、SIG のような活動では、こうした機能を活用する際に必ず管理者の教員を通さざるを得ず、手続きが煩雑になってしまいます。しかしながら、「連絡用フォーラム」では、設定により学生からの投稿や、資料の添

付も可能になります。そのため、実質的にはその SIG のホームページのような形で、メンバー間での情報や資料のやり取りに活用されています。

Bb 利用上の問題点

Bb を活用する上で最も重要なのは参加者がアクセスすることですが、学生からの声の中に興味深い意見がありました。それは、Bb で文学部コミュニティのリンクが見つかりづらいのでアクセスしないというものでした。学生が Bb を利用する一番の目的は授業との関係ですが、各授業のページにアクセスする際、その学生はログイン後の「My Page」画面の右側にある参加コースのリンクから入るというのです。そうした形で Bb を利用する場合、文学部コミュニティが含まれる My グループのリンクはその下に続くため、画面をスクロールしないとリンクが出てきません。それで「見つかりづらい」ということになるようです。このことから、学生が確実にアクセスする「My Page」の中でも右上の部分に確実に情報のリンクを提示できるアナウンス機能をより有効に活用する必要があるということが分かりました。

また、そのような事情も考慮し、コースメニューの構成自体も再検討が必要な状況にあります。文学部コミュニティでは創設以来 Bb を活用していますが、コースメニューは必要に応じて累積的に増えてきました。しかし、3年目を終えた今、利用頻度の低いセクションを削るとともに、利用頻度の高い「アナウンス」や「連絡用フォーラム」の利用を拡充させるということが必要であると思われます。

今後の Bb の展開

現時点では、Bb の最も基本的な機能しか活用していません。例えば、これまでは情報の発信が中心ということもあり、情報収集のためのアンケート機能は使ったことがありません。そうした可能性も含めて、大規模のグループという特性を踏まえながら、よりよい形で活動を支援できるよう、管理者もサポートを受けながら Bb を活用していきたいと考えています。

Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

今年度は震災に伴う学事日程変更の影響もあり、春学期の実施を見送り、秋学期のみ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目の全開講科目（但し、実験実習実技科目は除く）である。

また、社会的状況の変化や大学改革の流れの中で、これまでのアンケート内容ではそぐわない点も生じてきたため、今年度のアンケート調査より内容を改訂した。

対象科目：全人教育・FYE 科目群科目、言語表現科目群科目、社会文化科目群科目、自然科学科目群科目、総合科目群科目

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：秋学期＝180名／193名（93.3%）

実施開講クラス数：秋学期＝308クラス／332クラス（92.8%）

回答学生数：秋学期＝11,528名／14,683名（78.5%）

(2) 実施時期

秋学期：1月17日（火）～1月23日（月）

※一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.86 参照）

2. 集計結果及び公表（p.64～79 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育・FYE 科目群「一年次セミナー102」、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群
--

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記8分類についてはその平均値をホームページで公表している。

平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 11528

分野	この授業に対する学生の学習時間について		この授業の 平均値	無効 回答数
I	1	1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかかった時間	2.2	22
	2	上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	72

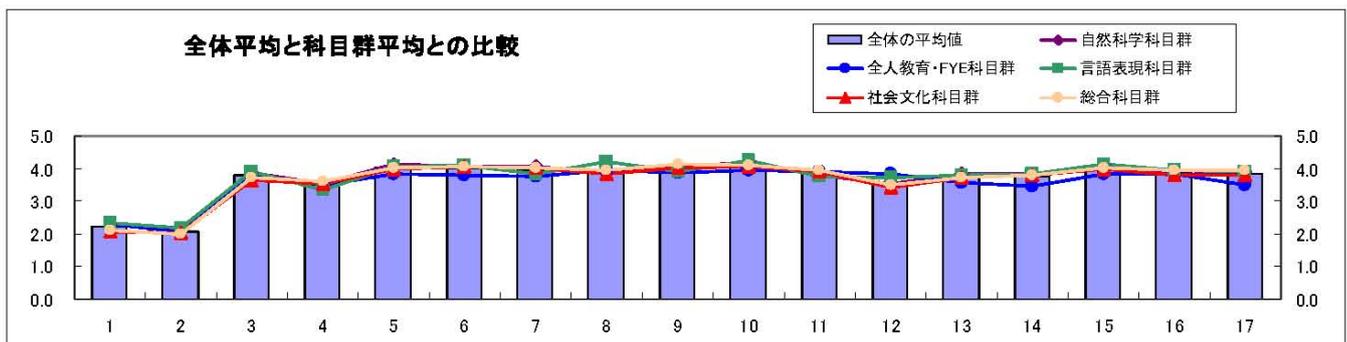
分野	この授業に対する学生の取り組みについて		この授業の 平均値	無効 回答数
II	3	この授業に積極的に参加した。	3.8	15
	4	シラバスは受講に役立った。	3.5	28

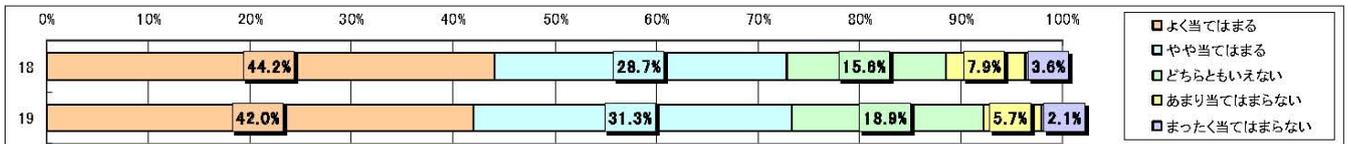
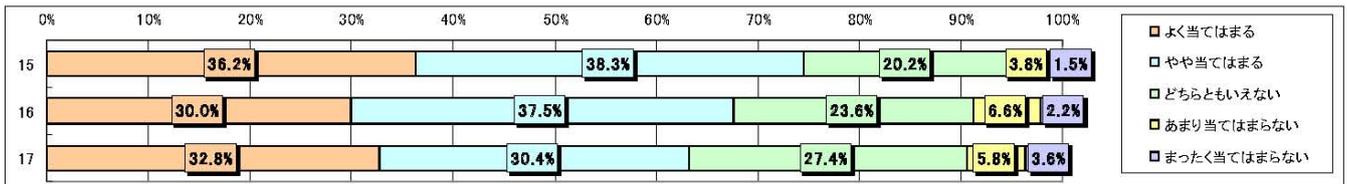
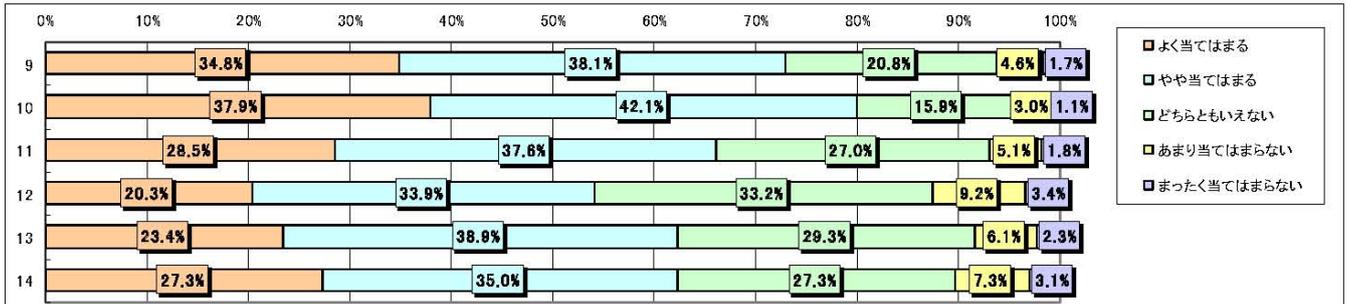
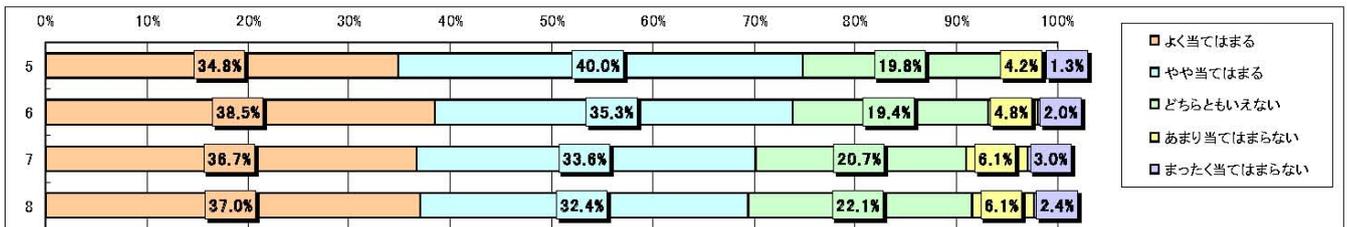
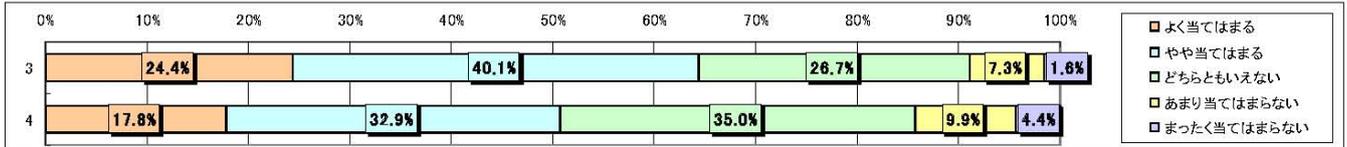
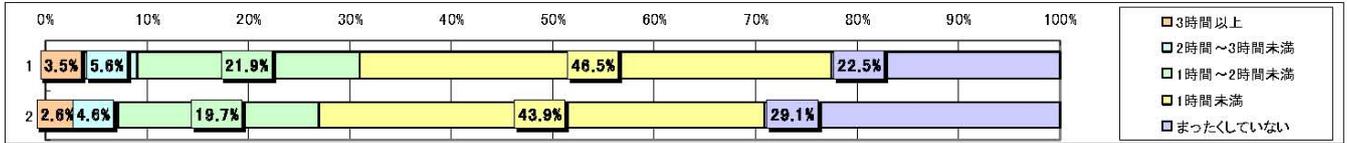
分野	この授業の進め方について		この授業の 平均値	無効 回答数
III	5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	17
	6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	17
	7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	29
	8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	9

分野	この授業を受けてみて		この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9	新しい考え方・発想に触れた。	4.0	13
	10	基本的知識が得られた。	4.1	11
	11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	21
	12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	27
	13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	23
	14	学問的興味をかきたてられた。	3.8	39

分野	この授業を総合的に振り返って		この授業の 平均値	無効 回答数
V	15	授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	14
	16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	12
	17	この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	32

分野	その他		この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18	この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	45
	19	この授業の受講者数は適切であった。	4.1	52





◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

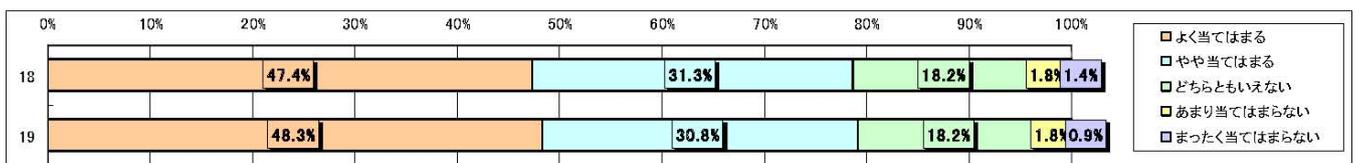
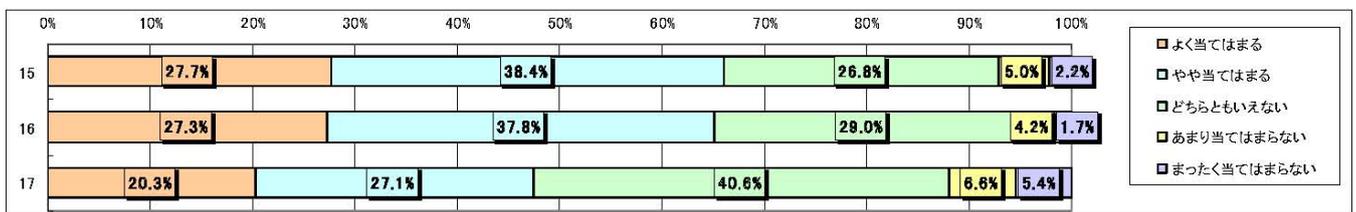
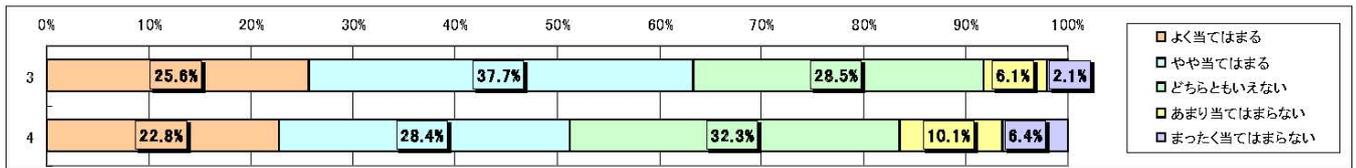
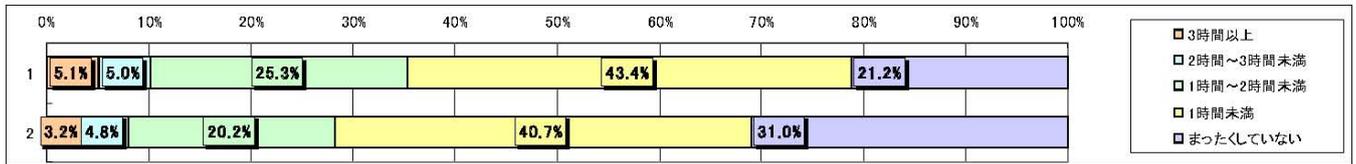
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 一年次セミナー102

回答数(全体): 1555

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の平均値	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	12
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	3
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.8	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.8	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.8	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	2
	10 基本的知識が得られた。	3.9	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.6	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.4	2
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.8	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	4
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	4



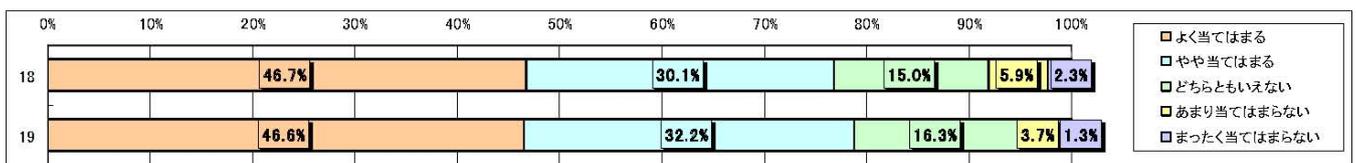
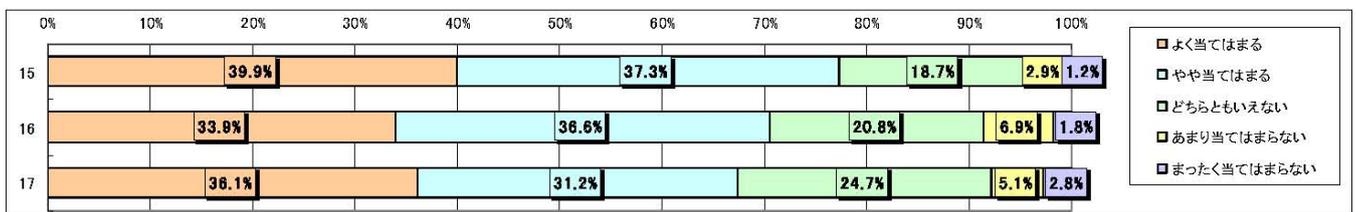
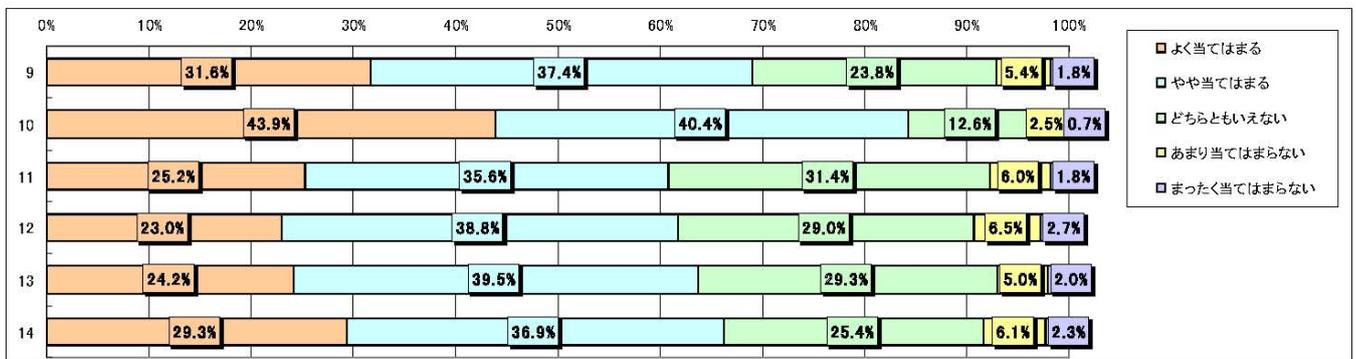
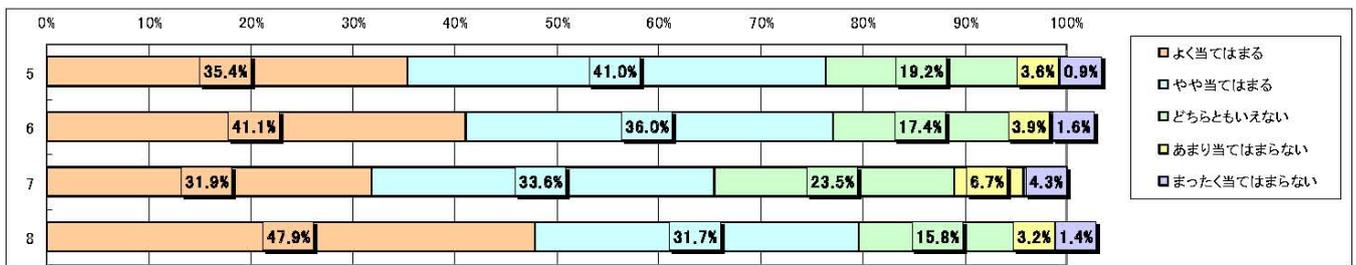
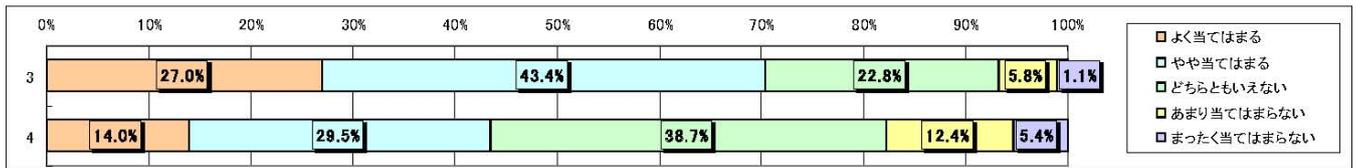
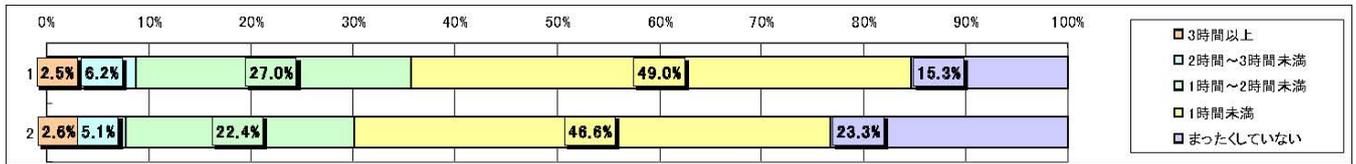
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2453

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	13
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.3	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	4
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.8	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.2	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	6
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	8
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	11
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	13



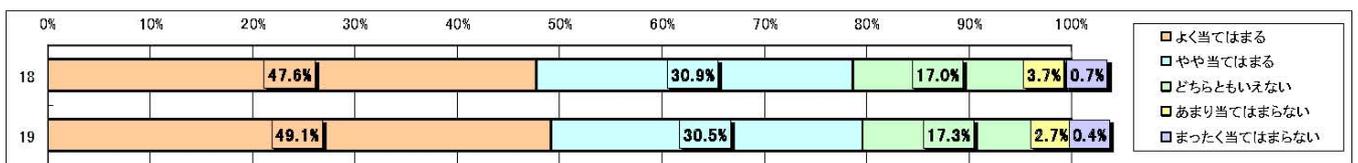
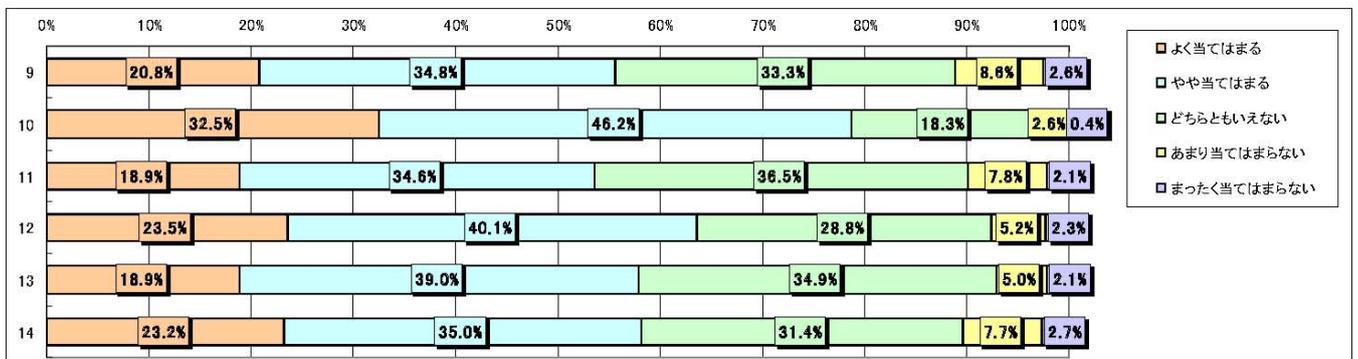
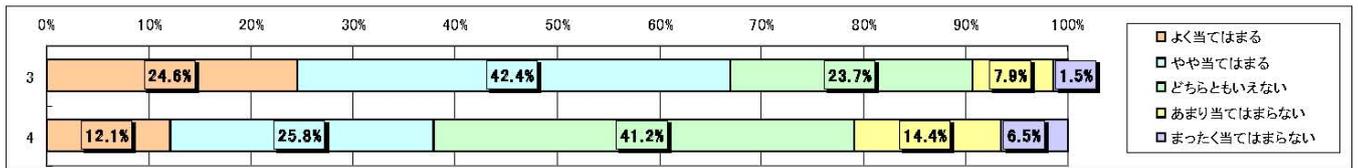
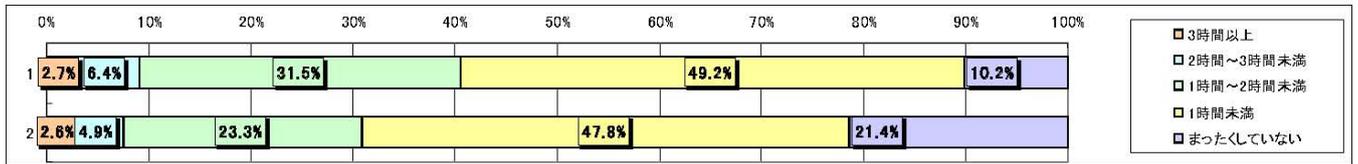
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 896

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	4
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.2	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.6	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.2	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.6	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.6	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	0
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4



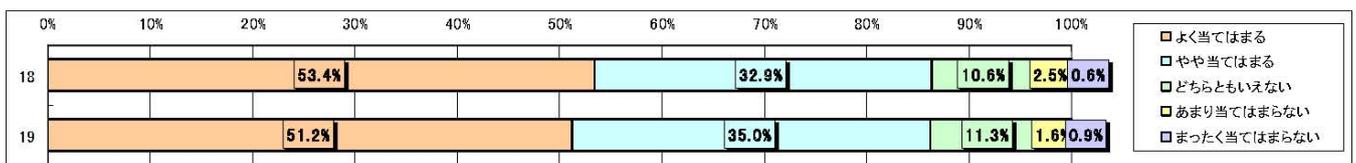
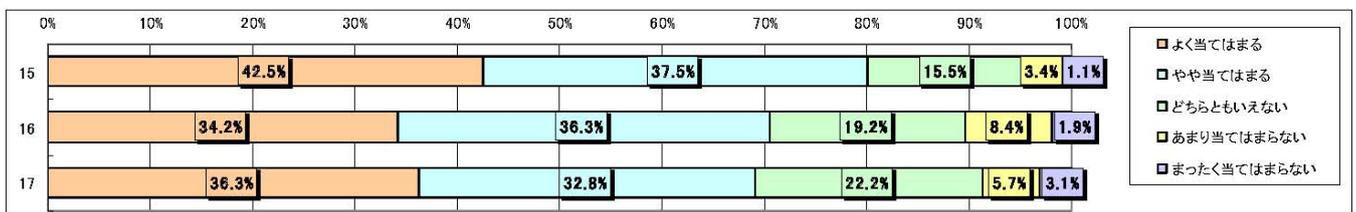
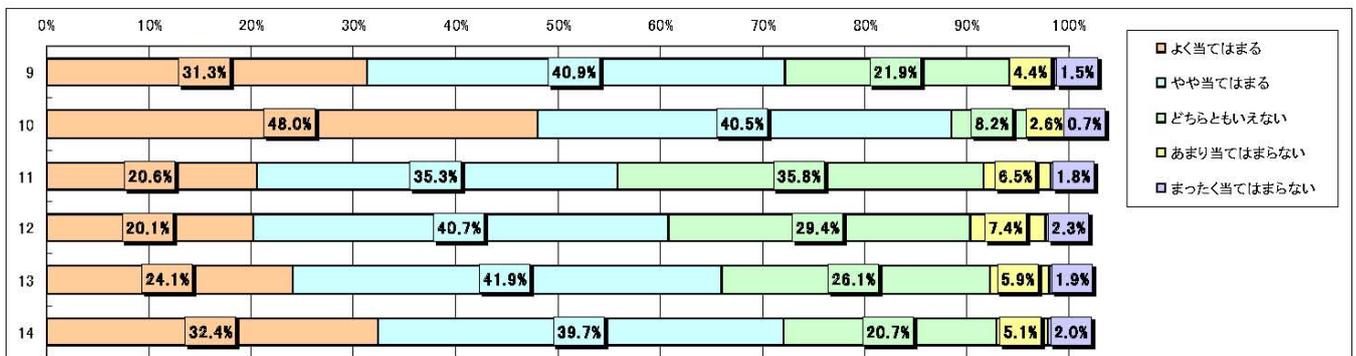
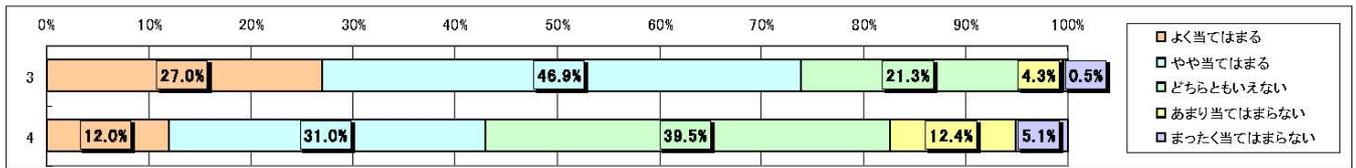
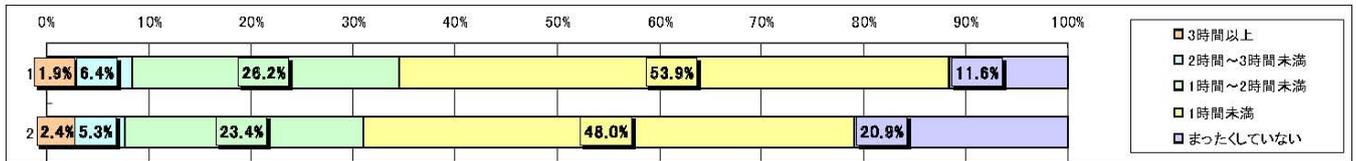
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 939

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	0
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	8
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.3	0
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	0
	10 基本的知識が得られた。	4.3	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.7	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4



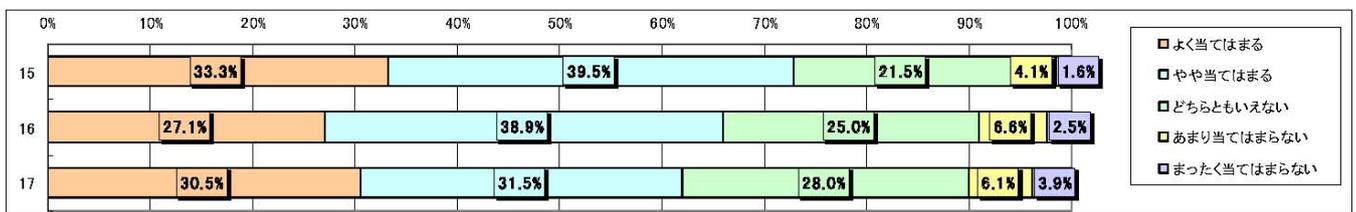
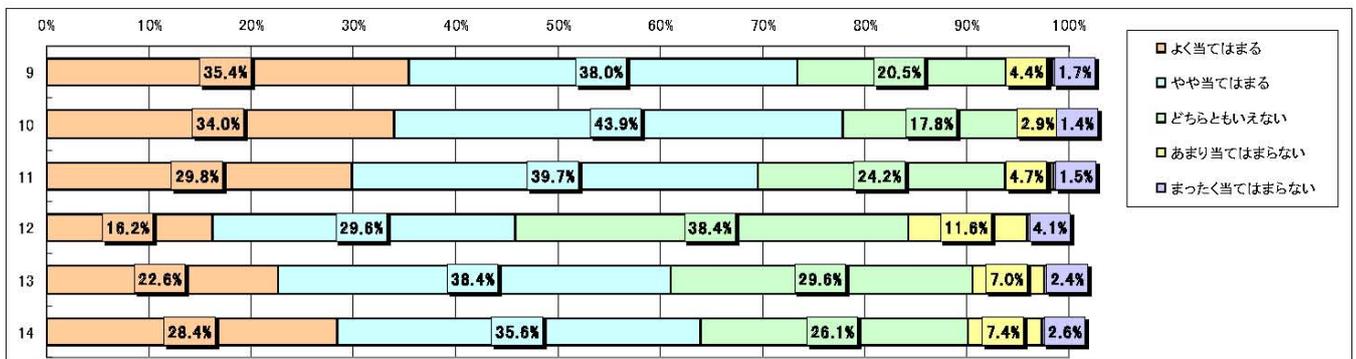
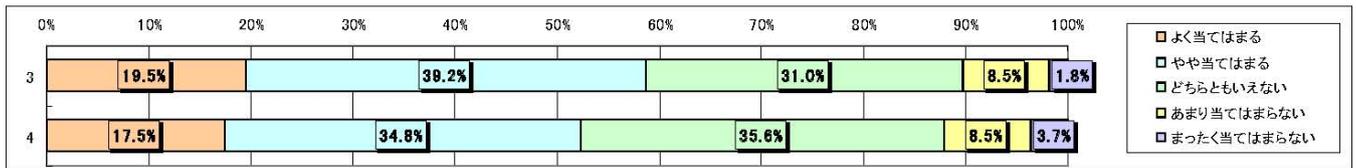
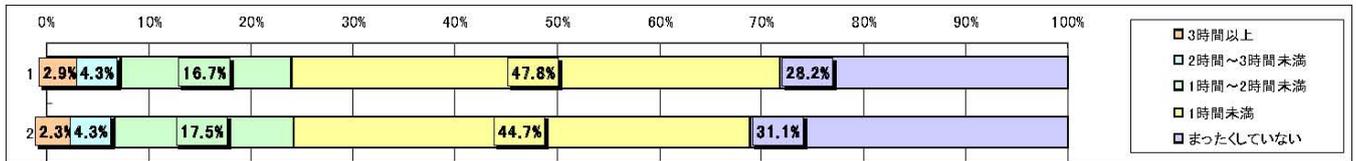
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 2854

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.0	16
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	6
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	7
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	9
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	5
	10 基本的知識が得られた。	4.1	6
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	8
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.4	10
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	9
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	16
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	6
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	5
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	9
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.8	15
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.8	17



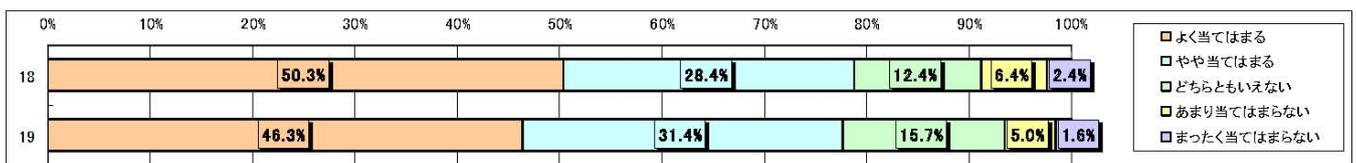
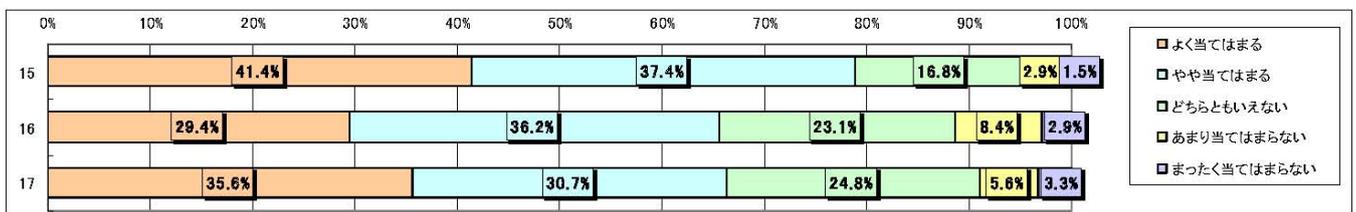
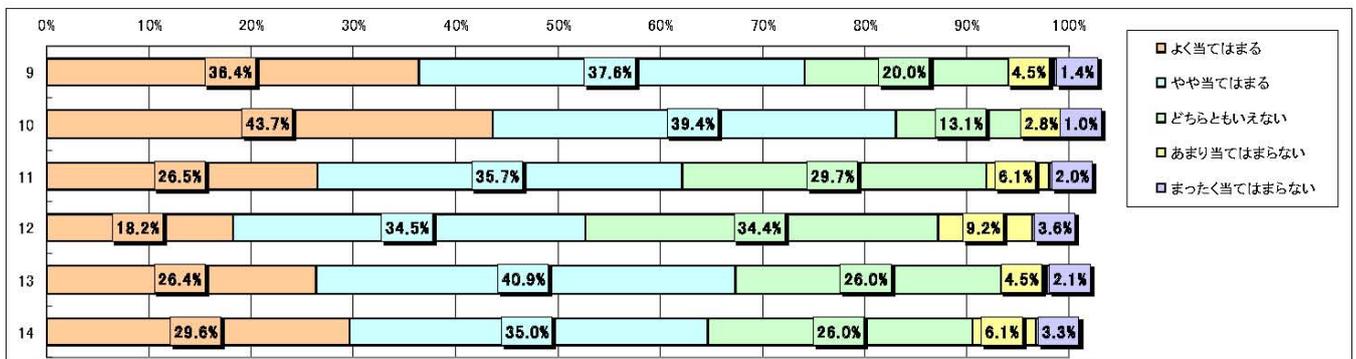
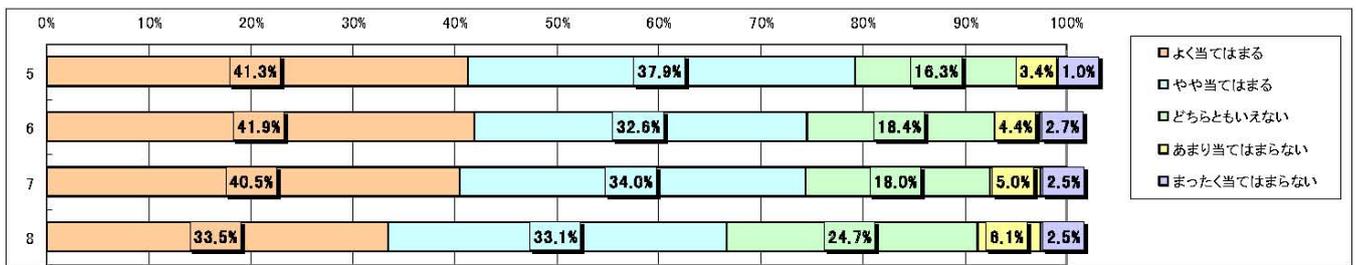
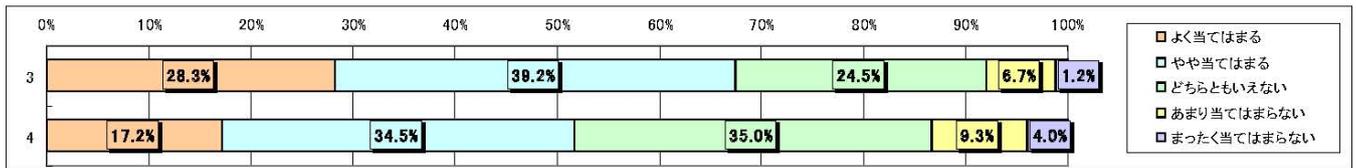
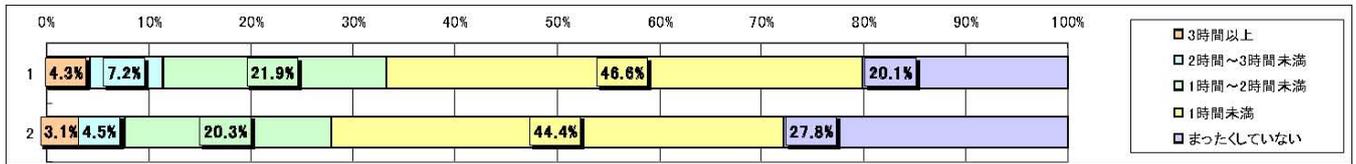
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2673

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の平均値	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	17
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	4
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	8
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	9
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	5
	10 基本的知識が得られた。	4.2	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	7
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.5	7
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	6
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	11
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	12
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	14



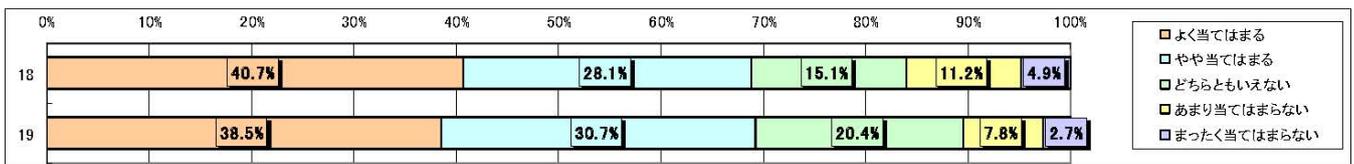
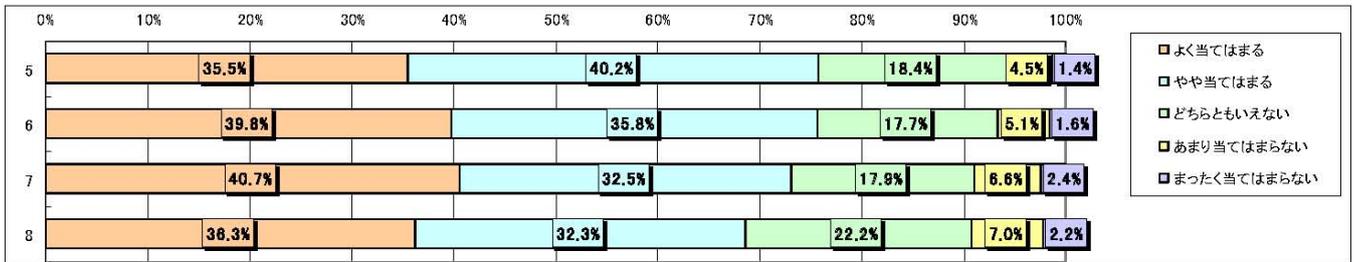
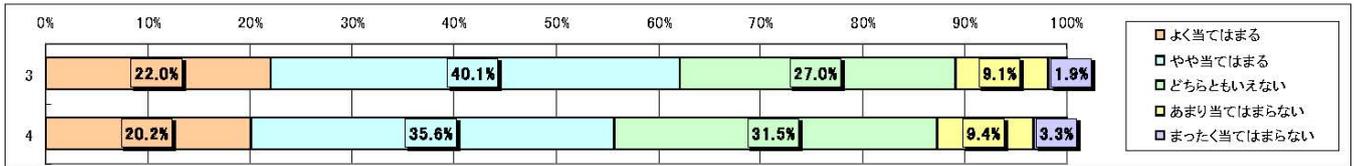
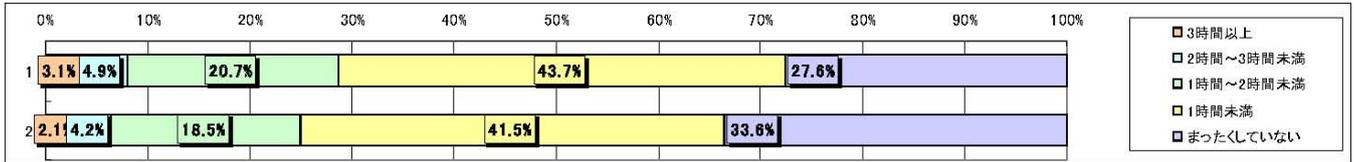
平成23年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

コア科目 生活関連・総合科目群

回答数(全体): 1993

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の平均値	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	9
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.0	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の平均値	無効回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	3
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	8
分野	この授業の進め方について	この授業の平均値	無効回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の平均値	無効回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.5	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	7
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の平均値	無効回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4
分野	その他	この授業の平均値	無効回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	4



参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 23 年 4 月 25 日 (月) 17:30~19:00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 平成 23 年度 会議日程に関する件
(2) 平成 23 年度 FD 研修会等に関する件
(3) コア科目 学生による授業評価アンケート 改訂に関する件
- 報告 : (1) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について
(2) 学士課程教育センター (コア・FYE 教育センター) 主催研修会等 DVD の貸し出しについて

第 2 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 23 年 5 月 23 日 (月) 17:30~19:00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 平成 23 年度春学期 コア科目の学生による授業評価アンケートの中止に関する件
(2) コア科目 学生による授業評価アンケート改訂版の集計表に関する件
(3) プレゼンテーション研修 フォローアップ研修に関する件
- 報告 : (1) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(2) 「平成 22 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(3) 教学部 SD 研修会報告~教学部における IR のあり方~
(4) 大学・大学院 在籍者等状況報告

第 3 回大学 FD 委員会

- 日時 : 平成 23 年 7 月 18 日 (月) 17:30~19:00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 新任教員研修会のあり方に関する件
- 報告 : (1) TAMAGAWA VISION 2020 Action Plan 2011 の取組について
(2) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画について

第4回大学FD委員会

- 日時：平成23年9月26日(月) 17:30~19:00
場所：教学事務棟150/151会議室
議案：(1) コア科目 学生による授業評価アンケート改訂版および集計表に関する件
報告：(1) 研修会開催について
(2) 大学院FD委員会主催TA研修会について
(3) 日本高等教育開発協会主催「第1回 高等教育開発フォーラム」参加報告

第5回大学FD委員会

- 日時：平成23年11月21日(月) 17:30~19:00
場所：大学9号館4A(学士課程教育センターFaculty Room)
議案：(1) コア科目 学生による授業評価アンケート集計表に関する件
(2) 平成24年度新任教員研修会に関する件
報告：(1) 研修会開催について
(2) 学生による授業評価アンケートについて
(3) TAMAGAWA VISION 2020 教員の教育力向上に対する取組について

第6回大学FD委員会

- 日時：平成24年1月16日(月) 17:30~19:00
場所：教学事務棟150/151会議室
議案：(1) 平成24年度新任教員研修会に関する件
報告：(1) 大学評価(認証評価)結果にみる今後のFD活動について
(2) 学生による授業評価アンケートについて
(3) 今年度FD活動報告書について

第7回大学FD委員会

- 日時：平成24年3月5日(月) 15:00~16:30
場所：教学事務棟150/151会議室
報告：(1) 今年度の各学部のFD活動について
(2) 来年度のFD研修会について

参考資料 2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリー・コメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリー・コメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリー・コメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名

開講時限	曜日	限
------	----	---

担当教員名

5	4	3	2	1
3時間以上	2時間<3時間未満	1時間<2時間未満	1時間未満	まったくしていない

I. この授業に対するあなたの学習時間について

1	1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
2	上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	5	4	3	2	1

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

3	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
4	シラバスは受講に役立った。	5	4	3	2	1

III. この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第 1 条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 24 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (学士課程教育センター)